ISSN 2187-1833

京都市学校歴史博物館研究紀要

第４号

目　次

『研究紀要』第四号の発行にあたって (1)

講演録　京都における高等女学校のあゆみ　和崎 光太郎 (3)

史料紹介　明治二五年　下京高等小学校　修学旅行記
車田 秀樹　和崎 光太郎 (19)

報告と課題　団体見学の実績と課題　－平成二十六年度を振り返って－
車田 秀樹　小中 秀則 (31)

論文　「日本画開拓の時代」の画家（一）　久保田米僊　森 光彦 (33)

平成 27（2015）年 10 月

京都市学校歴史博物館

正誤表

10 頁下段 8 行目　　カトリック　→　聖公会
11 頁下段 10 行目　　大正 11　→　大正 9
28 頁上段 9 行目　　就学　→　修学
28 頁上段 9 行目　　尋常小　→　尋常師範学校

『研究紀要』第四号の発行にあたって

「とりあえず出さなければ」、という思いで始まった研究紀要も、早いもので第四号の発行となった。たったの四号で感慨に耽っている場合ではないが、号を重ねるごとに内容が充実していっていることは、確かである。このことは、全国唯一の「学校歴史」を対象とした公立博物館、しかも市立学校だけで二五〇を優に超える政令指定都市・京都における学校歴史博物館が持つ可能性の豊かさを、示唆している。

すでに各所で報道・報告されているが、昨年度、当館は過去最高の来館者数（二〇七三三人）を記録した。博物館としてちょうど飽きられる頃である開館一六年目での達成である。しかも、これまでの最高来館者数は、開館一〇周年記念イベントを大々的に開催した平成二〇（二〇〇八）年度の、例年に比べて突出した記録だった。その記録を、平成二四（二〇一二）年度から三年連続でじわじわと来館者数が増加した結果、更新することができた。このような例は、他にあまりないのではなかろうか。

しかし、来館者数がすべてではない。来館者数は、あくまで博物館の社会的貢献度を示す一つの尺度に過ぎない。というのも、博物館は目の前のニーズに応えることや、数年単位での短期的な価値の保存だけではなく、五〇年、一〇〇年、またはそれ以上の期間での価値の保存、展示、発見こそを使命としているからである。

当館での所蔵品・管理美術作品は、主に閉校した学校所蔵のものや、学校での管理が難しくなったもの、または地域の方々から寄贈された史料からなる。現在も学校に所蔵されている教具・写真・文書・美術作品など、学校ゆかりの「お宝」を学校から借用させていただくことも多々ある。それらの成果としての常設展示・企画展示を、地域の方々や学校関係者、そして全国から京都を訪れるみなさまに、ご覧いただいている。このように、当館はまさに地域の方々や学校関係者によって支えられ、成長してきた博物館である。

このように成長してきた当館を根幹で支える「知」の集積成果を活字化し、研究者・学生の研究活動や市民の生涯学習などに資することに、この研究紀要の意義がある。来館者数の増加や来館者一人一人の満足度を上げることはもちろん大切だが、それと並行して学術的な成果報告を積み重ねていくことは、先に述べた博物館としての重要な「使命」のうちの一つであろう。

冒頭で触れた本号における「充実」の中身を説明しておこう。初めての試みとして、講演録と教育史料の翻刻・紹介を、そして森による初めての論文を掲載した。初めて尽くしである。講演録と史料紹介は戦前の中等教育に関する内容、森論文は学校ゆかりの画家に関する内容で、番組小学校史という当館の本流ではない。しかし、重要であるにもかかわらずこれまで注目されてこなかった領域だからこそ、日々の史料調査や研究、来館者やレファレンスへの対応、コラムの執筆や各地での講演、年二回の企画展の準備など、学芸員が日常を通して蓄積していった断片的な知識をまとめ、体系化し、広く世に還元する意義がある。もちろん、単に「誰もやってないからやりました」「こんな新しい発見がありました」という類のものではなく、現在または将来において意義があるにも関わらず誰もやっていないと判断したテーマを選んでいる。団体観覧の報告にしても、然りである。生涯教育施設としての博物館が、どのような計画のもとに、どのような来館者対応を行い、どのような結果が出て、そこからどのような新しい計画が構築されていっているのかは、単に展示の報告をしたり来館者数を並べたりするだけでは、可視化して他館と情報を共有することはできない。だからこそ、第二号から続けて掲載されている。

巻頭言が長くなりすぎた。詳しくは、それぞれの本文をご覧いただきたい。

（学芸員　和崎　光太郎）

京都における高等女学校のあゆみ

和崎 光太郎

はじめに

こんにちは、京都市学校歴史博物館の学芸員、和崎です。今日のテーマは高等女学校です。高等女学校とは、今から一三〇年くらい前の明治中期に誕生し、戦後の一九四八（昭和二三）年三月まで続いた、小学校卒業後の女子のための学校の一つで、「高女」と略されて呼ばれていました。京都市内には、一九四五（昭和二〇）年四月の時点で、公立七校、私立一一校がありました。

さて。一つの高女に特化した本や記念誌などはたくさんあるとは思いますが、京都市という自治体の範囲内にある複数の高女をまとめて話したり、本にしたりということは、おそらくこれまでなかったことだと思うのです。僕も大学・大学院と教育の歴史を勉強してきましたが、やはり有名な高女、特に公立の高女をピックアップした研究が多く、今日の政令指定都市規模で、全市での「面」を単位として高女を扱った研究は、僕の知る範囲では無かった気がします。今日この講演会には、元高女生の方々がたくさんいらっしゃっています。元高女生の方々は、これまで母校の歴史には長く親しんでこられたと思います。約七〇年の時を超えて、今日は自分の母校だけではなく、他の高女のことも広く知っていただき、京都の高女が全体でどのように歩んできたのか、一緒にタイムスリップしていただければと思います。

ちなみに今回の企画展「京都の高等女学校と女学生」は、実は僕の頭の中では二年半前から、「やろう」と決めていました。それからずっと、頭の中でアイデアを熟成させてきたわけです。でも、ご存じの方も多いと思いますが一人の学芸員が一年間に二回の企画展を担当しながらなので、今回の展示の史料を本格的に集めるとかの実質的な準備期間は、最後の半年間です。そこに私の無精さと未熟さが災いしまして、最初におことわりしておきますが、見なければいけないとわかっていながら見られていない史料や本もいくつかあります[一]。

では、二年半前に何があったのかというと、ある元小学校教員がお亡くなりになり、そのご子息から「家に古くて何だかよくわからないものがたくさんあるから見に来てほしい」とお電話をいただいたのです。それでさっそく伺ってみると、その元教員は堀川高女の卒業生だったようで、高女時代のものがやたらとたくさん、整理されて残っている。自分の人生の象徴と言いますか、自分が一番輝いた時の史料ほど、このように残っているものなのかもしれません。これらの史料に触れる中で、やはり座学で歴史を学ぶのに加えて、現場で一次史料に触れることの大切さを、再認識しました。それと同時に、「高女の展示は今しないともうできないな」、という危機感をいだきました。これらの史料を残した方はもうお亡くなりになったわけで、率直に申し上げて、高女に在籍したことのある方々が、もうみなさんかなり高齢になってきているからです。当事者がいなくなってから展示をするのではなく、今開催して、当時のことや同窓会でのことを直接知る方から、直接学ぶことのできることを学び、検証し、その成果を後世に伝えなければならないという衝動が、沸き起こったのです。また、これは高女だけではなく、旧制中学校や商業学校、工業学校、青年学校など、戦前から戦中にかけての学校にはすべて当てはまることだと思います。で、この方の史料をたくさんご寄贈いただきまして、「やろう」と決めたのです。

京都の高女は、一八八七（明治二〇）年に日本で最初の公立高女である京都府高女が創設されたのが始まりで、最終的には一九四五（昭和二〇）年に同志

一 学校史・同窓会誌は、主に当館に寄贈・借用いただいたものを参照しました。

社の女学部が同志社高女になり、一八校がそろいます。ただし、そのうち四校は一九四〇（昭和一五）年以降に女学校から高女に昇格した、または高女として創設された学校です。高女が制度として終わりを迎えるのが一九四八（昭和二三）年三月なので、これらの四校は高女としては非常に短命でした。今日のこのお話しでは、京都市の高女全体の特徴と、各学校の特徴、この両方に意を用いながら、お話ししていきたいなと思います。ただし、中にはまだよくわからない高女もあります。市立伏見実科高女。ここは後継校がなく、実態がよくわかっていないのです。跡地が現在の市立伏見中学校の一部に転用されたであろうことはわかるのですが、高女時代の史料が中学校には現存しておらず、あとは個人の方から新史料が出てくるのを待つだけ、という状態です。後継校が現存しない淑女高女と菊花高女についても、似たような状態です。つまり私はまだ、京都の高女について調べ始めたばかりの若輩者なのです。この講演は、これまで学ばせていただいたことの成果の発表の場でして、到達点ではなく通過点です。「和崎はこんなことも知らないのか」というようなことがありましたら、講演後にぜひこっそりと教えていただけますと幸いです。

第一部 全国の動向

では、いよいよ本題です。第一部では、まずは全国的に高女の歴史をたどっていきましょう。高女とはそもそも何なのかは最初にお話ししましたが、高女がきちんと制度化されたのは、一八九九（明治三二）年施行の高等女学校令です。ただ、府一、この学校は「京都府立京都第一高等女学校」[二]が正式名称で、現在の鴨沂高校が後継になりますね、ここに在学されていた方は、「それより前からうちは高女でしたよ」とおっしゃるのです。その通りです。高等女学校令が施行される前から、名称として「高等女学校」を名乗っていた学校が全国にいくつかあり、府一はその代表格です[三]。端的に言いますと、〈名乗るもの〉であった「高等女学校」がきちんと制度化され、中等普通教育の学校として〈認められるもの〉になったのが、同令が施行された一八八九（明治三二）年というわけです。ちなみに、中等教育というのはおおよそ現在の中学・高校にあたります。普通教育というのは、商業や工業など特定の分野に特化しない教育ということです。つまり高女とは、現在の中学・高校水準の、専門領域に特化しない普通教育が施された、原則として修業年限四～五年の学校です。

では、旧制の中等教育の特徴はどのようなところにあったのでしょうか。まず、男女別学だったということです。尋常小学校を卒業した後、時代と人によっては高等小学校を卒業した後ですが、男子の進学先は中学校、商業学校、工業学校などがありました。全部男子校です。女子の進学先は、高等女学校や裁縫女学校などです。男女別学ということは、当然ながら教育内容も別でした[四]。また、高女には男子の中学校にはない、独特の制度がいくつかあります。その代表格は、実科高女でしょう。実科高女とは、一九一〇（明治四三）年に設置が認められた高女の一種で、家事や裁縫など実用的な科目に重点をおいた高女のことです。原則として外国語の授業がなく、授業の約半分が裁縫関連の科目で占められていました。もっとも、当時はまだ衣服は「買うもの」ではなく「作るもの」で、「作る」ことはもっぱら女性の役割だとされていましたので、裁縫の技術が重要視されていたのは、実科だけではなく高女全般についていえるこ

二 「京都」が二回出てきますが、「京都府立」の後の「京都」は、京都市内という意味です。これは市内の旧制中学校の名称も同じです。

三 ちなみに最初の「高等女学校」は、東京の女子師範学校附属高等女学校（現お茶の水女子大学附属中学校、同高等学校）で、一八八二（明治一五）年の設立です。

四 女子教育・男子教育をそれぞれ個別に論じるにとどまらず、男女別学という点に切り込んだ研究書として、小山静子編『男女別学の時代 戦前期中等教育のジェンダー』（柏書房、二〇一五年）があります。また、米田俊彦『資料にみる 日本の中等教育の歴史 三版』（東京法令出版、一九九九年、初版は一九九四年）は、男女の中等教育を資料に基づきながらたどることができ、私は学生時代からずっとお世話になっているのですが、残念ながら今は絶版になっています。

とでした。

二つ目の特徴は、義務教育ではなかったということです。そもそも尋常小学校が義務教育という発想が定着し始めたのは明治二〇年代でして、法令的には一八八六（明治一九）年の小学校令で誕生した四年制または三年制の尋常小学校に「みんな通いなさい」、と定められたのがきっかけでした。明治三〇年代に就学率も通学率も急上昇し[五]、一九〇七（明治四〇）年の小学校令改正で尋常小学校は六年制になります。その後の二〇年ほどで、都市部だけでなく農村部でも「小学校に六年間通う」ということが「あたりまえ」と認識されるようになっていきました。このような認識は、かれこれ一〇〇年ほどの歴史を持っているということになります。ちなみに、このだいたいみんなが小学校に通うようになった頃の制度では、尋常小学校卒業後の進学先は、初等教育の延長と中等教育、大きく二つの系統に分けられていました。前者の多くは小学校併設の学校で、高等小学校や実業補習学校などがありました。こちらは働きながらでも通うことができました。後者は入試に合格しなければ入学することができず、旧制中学校や高女、商業学校、工業学校などがそれにあたります。高女には、高等女学校令が出されて以降は、初等教育を終えた一二歳以上の女子が入学できました。ただし、当時は小学校に通う年齢になると家での「お手伝い」要員、つまり労働力として期待されていたわけで、特に女子には下の子の面倒をみるという重要な役割が課せられていました。なので、女子が一二歳以降にもまだ日常的に学校に通うことができる家庭に育つことが条件だったわけで、このあたりが裕福な家庭で育たないと高女には入れないということになるのです。単に授業料云々の問題ではありません。当時はまだ、女子が中等教育を受けるということには、授業料以外に様々なプレッシャーがあったのです。また、前にお話ししたように入試がありまして、特に公立は難関だったようです。

五 ただし、就学率と通学率を追うだけでは、学校での「生活」がいつ、どのように「日常」に組み込まれていったのかはわかりません。詳しく知りたい方は、硬派な研究書ですが、柏木敦『日本近代就学慣行成立史研究』（学文社、二〇一二年）をご参照ください。

では、高女生たちは何を学んでいたのでしょうか。教科レベルは大まかに言えば現在の中学・高校に該当しますが、戦前期特有の修身や、女子特有の裁縫・家事などの科目もありました。ただ、その内容、特に英語や数学などの水準は、高等教育への進学を念頭においた旧制中学校のレベルには及ばなくて、大きな差があったのも事実です。ちなみに、ここに高女ならではの面白さ、興味深さがあります。というのも、原則として進学しない、したとしてもそのほとんどが男子のような激烈な受験競争を勝ち抜かねばならないといった世界ではないにもかかわらず、高女生のみなさんは本当によく勉強をします。現在では、受験に必要のない教科は勉強しないといったことがまかりとおっており、何を隠そう僕も高校時代に効率重視の呪縛から逃れられなかった一人なのでよくわかるのですが、入試のための勉強ではない学び、これが高女にはあったわけですね。このあたりは今こそ、その実態を知ることの意義は大きいのではないかと思います。話を元に戻しましょう。高女生はよく勉強した、といっても、学校による差はもちろんかなりあったようです。「才女」育成を重視した高女、「良妻賢母」育成を標榜した高女、宗教教育を重視した高女など、その特徴はさまざまでした。この学校別の特色は、各高女の年史もの、たとえば『〇〇高等女学校□□年史』とか、または新制高校になった高女だと『〇〇高校□□年史』の最初のあたりを読むと、よくわかります。特に戦前の学校は、学校ごとの特色が今より濃かったので、自分の母校を調べてみると、意外な歴史がわかるかもしれません。

次に、制度に注目しましょう。制度上の高女のあゆみは、一八九九（明治三二）年の高等女学校令よりも遡ります。まず、一八九一（明治二四）年の中学校令改正です。ここで、高等女学校が法令で初めて定義づけられました。第十四条には、「高等女学校ハ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ施ス所ニシテ尋常中学校ノ種類トス」とあります。尋常中学校とは旧制中学校の当時の呼び名でして、要するに男子の学校の一種として、高女が制度化されていたのです。しかし、高女の数は一向に増えませんでした。一八九〇年代は、まだようやく男子校である中学校の設置が進み始めた時期であり、いわんや女子教育は、という状態

です。それが、高等女学校令で道府県に高女の設置が義務付けられることで、高女もいよいよ全国の都市部に設置されていったのです。この高等女学校令が制定された背景には、女子の小学校卒業率の上昇と、「良妻賢母」として間接的に、つまり妻・母として国家に貢献する女性を育成すべきという新しい考え方の広がりがありました[六]。一方で、高等女学校令が公布・施行された一八九九（明治三二）年には、訓令一二号というのが出されます。この訓令は、官公私立学校における宗教教育を禁じたもので、抜け道があるにはあったのですが、特にミッション系の女学校には、宗教教育を捨てて高女になるか、宗教教育を守って女学校のままでいるか、という究極の選択を迫ったものでした。たとえば当時の京都には、同志社女学校と平安女学校がありましたが、この訓令一二号が出された後、一九〇〇年代に私学の高女が次々と誕生する中で、どちらも高女にならずに女学校のままでいつづけています。

以上が制度の話になりますが、やはり興味深いのは、今は無き高女という独特な空間で女学生たちがどのような生活を送っていたのかということです。

明治末期、西暦で言うと一九〇〇年代から一九一〇年代前半には、まだ女子が進学することへの偏見が根強く、女学生は「新奇な存在」として社会的に注目され、マスコミなどから見世物的な扱いを受けることが多々ありました。海老茶色の袴姿をした高女生が俗に「海老茶式部」などと呼ばれるなど、袴の制服をシンボルとした高女生が話題となります。一九〇〇年代初等は、特に「学生風紀問題」という、要するに女学生のいかがわしい噂が日刊紙や今日の週刊誌のようなものでさんざん書かれ、それを読者が「消費」するということが、早くも起こっています。読売新聞で『魔風恋風』という、完全に男性目線で女学生を描いた、女学生にとってはなはだ迷惑な小説が連載されるのですが、これが大ヒットするあたり、当時の風潮を象徴しているかと思います。大正の中期、西暦で言うと一九一〇年代後半から、高女生の数が飛躍的に増加して、高女生は生徒数で中学生を上回ります。実科高女の設置や、男子には商業学校・工業学校・軍の学校など中学以外にも様々な選択肢があったことなどが、その原因です。一九〇五（明治三八）年度の尋常小学校入学者のうち六年後に高女に進学したのが全体の三・三％だったのにくらべ、一九二〇年度の尋常小学校入学者では一二・一％にまで上がります[七]。一九二〇年代後半になると、高女の制服が袴から次第に洋装のセーラー・ブレザーへと変化していきます[八]。当時は体操着が定められておらず、体育や運動会が制服姿のまま行われており、袴よりも機動性に富む洋装は実用的だったようです。また、フォークダンスや球技などが取り入れられ、都市部の高女では電車での通学が始まるなど、授業や通学の風景が現代風になっていきました。校舎の鉄筋化も進みます。これまでは、卒業後は「嫁入り」するのが一般的でしたが、女性の社会進出が進んだことで、高女を卒業した後に今の専門学校や女子大にあたる学校で勉強したり、いったん就職したりしてから「嫁入り」することが多くなったのも、この頃です。

ちなみに、女学生の間では、裁縫は数学・英語・理科と並んで人気がなく、人気があったのは国語や地理・歴史だったようです。いつの時代にも、生徒は政治家や先生の思うとおりにはそう簡単にはならないものです。与えられた制度の中で、うまいこと適応しつつ自分の楽しみを見出し、そこに力を入れるも

六 このような考え方は、明治期に誕生した極めて近代的なものです。「良妻賢母」という考え方がどのように成立し、広まったのかは、小山静子『良妻賢母という規範』（勁草書房、一九九一年）に詳しく書かれています。

七 前掲『資料にみる　日本の中等教育の歴史　三版』三五、四四頁。

八 この点についての質問が、企画展開催中に特に学生から多かったので、始めに読むべき文献として桑田直子「一九二〇―三〇年代高等女学校における洋装制服の普及過程　―洋装化志向および制服化志向の学校間差異に注目して―」教育史学会機関誌編纂委員会『日本の教育史学』（第三九集、一九九六年一〇月）をお薦めします。『日本の教育史学』は教育史学会という学会の機関誌で、CiNiiというサイトで閲覧できます。また、難波知子『学校制服の文化史　日本近代における女子生徒服装の変遷』（創元社、二〇一二年）では、高女に限らず女学校の制服を通史的に知ることができます。なお、この講演録ではいわゆる標準服や改造服も、煩雑を避けるため制服と表記します。

のだと思います。女学生は、とにかく読書好きで筆まめな傾向があり、女学生同士で手紙のやり取りを頻繁に行っていたようです。今展示していますが、卒業の際の寄せ書きを見ると、多くの女学生が自分のサインを持っていたことがわかります。しかもやたらと字がうまい。課外活動では、習い事として茶道・華道が主流だったようで、昭和になるとモダンな女学生がピアノを多く習うようになったようです[九]。

第二部 京都における高女のあゆみ

第二部は、現在の京都市内における高女のあゆみをお話しします。ここからは学芸員らしく、史料を用いつつのお話しです。また、お配りしました変遷図（本稿末部にあります）を見ながらお聞きいただくと、わかりやすいかと思います。

京都における高女のあゆみを考えるにあたり、時代を大きく四つの時期に区分します。

まず、高等女学校令以前、すなわち一八九九（明治三二）年までです。日本初の学区制小学校である番組小学校が京都市中（しちゅう）に創設され始めて三年後の一八七二（明治五）年、京都における高女の起源である新英学校及女紅場という華族・士族のための学校が、鴨川のほとり、土手町丸太町に創設されます。丸太町の橋の西側です。「新英学校」は文字通り英語を学ぶところです。「女紅」は「女巧」と同じ意味なので、「女紅場」というのは女性の職業学校のようなものです。この二つがセットになっていたのです。華族・士族が英語と手芸などを学んでいた学校だとイメージしてもらえればいいかと思いますが、次第にやってもやらなくてもよい予科だった「普通学」の比重が高まって、最終的に「普通学」をメインにした女学校になります[一〇]。開校前にこの地にあった九条家河原町邸の門が校門に使われるなど（史料①）、当時の京都において非常に存在感のある学校だったと思います[一一]。よく「女紅場が女学校の源流」と語られますが、正式には、高女の源流になったのは女紅場ではなく、新英学校の方でした。一八七六（明治九）年に京都女学校及女紅場と改称され、女学校は府の学務課、女紅場は勧業課の管轄になり、その六年後の一八八二（明治一五）年には女紅場は廃止、京都女学校は京都府女学校と改称されるという経緯をたどるからです。さらに一八八七（明治二〇）年に京都府高等女学校と改称されます[一二]。これが、府内で最初の「高等女学校」、日本で最初の公立「高等女学校」の誕生です。当時の制服はまだ着物で（史料②）、高女生は非常に格式

① 新英学校及女紅場、1875(明治8)年頃、『京都府教育史 上』(1940年)より

② 京都府高女、1895(明治28)年頃、京都市学校歴史博物館蔵

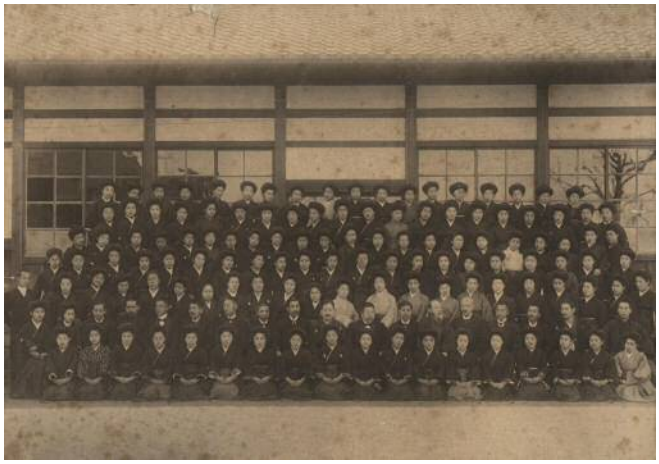
九 高女生の生活を描いた本はたくさんありますが、稲垣恭子『女学校と女学生 教養・たしなみ・モダン文化』（中公新書、二〇〇七年）は、京都の女学生についてたくさん書かれており、お薦めです。

一〇 新英学校及女紅場については、坂本清泉・坂本智恵子『近代女子教育の成立と女紅場』（あゆみ出版、一九八三年）二九―五八頁に詳しく書かれています。

一一 一九〇〇（明治三三）年に京都府高女が現在の鴨沂高校の地（上京区寺町通荒神口下ル）に移った際、校門と茶室も移築されました。

一二 新英学校及女紅場の頃から草創期にかけての京都府高女については、小山静子「高等女学校教育」本山幸彦編『京都府会と教育政策』（日本図書センター、一九九〇年）に詳しく書かれています。

の高い存在でした。また、明治初期から、小学校で学んだ後（学んだ年数は人によってさまざまです）の女子教育の場が少しずつ用意されていっていました。一八七三（明治六）年に設置された柳池女紅場と初音女紅場、一八七七（明治一〇）年に「京都ホーム」を改称して誕生した同志社女学校などは、その代表的な例です。



③ 市立高女第一回卒業記念写真、1911(明治44)年、堀川同窓会蔵

次に、高等女学校令以降の明治期、一八九九（明治三二）年から一九一二（明治四五）年までを見てみましょう。制服が着物から次第に袴になっていった時期です（史料③）。京都の高女における最初の袴制服は、一九〇二（明治三五）年の京都府高女の制服で、色は海老茶ではなく古代紫色だったようです[一三]。山紫水明の紫、パープルサンガ（現京都サンガF．C．）の紫ですね。当時はまだ京都には京都府高女しかなく、その数年後から高女がたくさんできます。そのたくさんできる高女は、思いっきりこの紫袴の制服の影響を受けるかと思いきや、そうでもないようで、府一と府二の校長先生が制服についてけっこう違う考えを持っていたりして興味深いところです[一四]。ちなみにこの時期には、府立第二高女（現府立朱雀高校）・市立高女（現市立堀川高校）という公立二校と、京都淑女高女、菊花高女、京都高女（現京都女子中学・高校）、精華高女（現京都精華女子中学・高校）という私立四校が誕生しています。全国的にも、この時期は高女の数がじわじわ増加していっています。

一九〇〇（明治三三）年に京都府高女が現在の鴨沂高校の地、寺町通荒神口下ルに移転したことで、元の場所が空き地になります。そこに、一九〇四（明治三七）年に新しい府立高女が開学するのにあわせ、京都府高女は京都府立第一高女と改称、新しい高女は京都府立第二高女となります。ほどなくして「府一」「府二」という、現在でも京都では一部の年齢層・階層で通用する名称が用いられ始めたようで、府二の方はおさがり校舎の老朽化が激しく、九年後に現在の朱雀高校の場所に新築移転します。ちなみに、略称についてですが、男子校である府立中学校は、「府」をつけずに「一中」（現府立洛北高校）、「二中」（現府立鳥羽高校）、「三中」（現府立山城高校）と呼ばれていました。中学校は昭和になるまで市立がなかったことが、その原因だと思われます。逆に府立がなかった商業学校は、「一商」（現市立西京高校）、「二商」（現市立北野中学）、「三商」（現市立桃山中学）と「市」をつけずに呼ばれていました。

話を戻しましょう。一九〇八（明治四一）年には、現在の堀川高校の場所に市立高女が開校します。私学は、前述したようにお東さん（東本願寺）の隣の京都淑女女学校、大宮寺ノ内の菊花女学校、御所の隣に開学した精華女学校が相次いで高女に昇格します。淑女と菊花はその後移転を繰り返しますが、神道系の精華、戦後に無宗教になりますが、精華は高女昇格とともに現在地に移り、その後移転しません。ユニークなのが仏教系の文中女学校で、すでに開学していた京都高女を吸収合併することで高女になったケースです。これが現在の「京女」です。母体を文中女学校、名前を京都高女から引き継ぐことで、成立したのです。

これらの高女では、卒業時に卒業生が記念作品を制作したようです。作品の

一三 前掲『学校制服の文化史　日本近代における女子生徒服装の変遷』一五二頁。

一四 前掲『学校制服の文化史　日本近代における女子生徒服装の変遷』一三三―一三五頁。

④ 市立高女「第二回本科卒業生記念帖」、
1912(明治45)年、堀川同窓会蔵

⑤ 精華高女「第一回卒業生紀念書画帖　全」、
1911(明治44)年、京都精華女子中学・高校蔵

体裁は学校によって異なりますが、おおよそA三サイズ余りの画帖が用いられていました。史料④⑤をご覧ください。どちらも高質な和紙に描かれ保存状態が良く、現在でも色あせていません。制作したのは本科四年生で、現在の高校一年生にあたります。当時の高女生の文化的素養が伝わってきますね。

大正期以降（一九一二年以降）になると、各高女は個性あふれる学校建築を有するようになります。京都高女は、一九一四（大正三）年に東山の現在地に移転した直後は、簡素な木造校舎でした。しかし次第に生徒数が増加し、校舎の拡張が進みます。史料⑥の右奥の建物は「錦華殿」といい、一八九八（明治三一）年に西本願寺門主・大谷光瑞と妻・壽子の新居として建てられ、一九二〇年に京都高女に移築されたものです[一五]。この頃の京都高女は目覚ましい発展を遂げており[一六]、同年には、高女卒業生が入学する女子専門学校（現京都女子大学）を京都でいち早く設立しています。正式名称は、京都女子高等専門学校といいました。ちなみに、府一の専攻科が独立する形で府立の女子専門学校（現京都府立大学の一部）が設置されたのは、この七年後の一九二七（昭和二）年のことです。

⑥ 京都高女・京都裁縫女学校の女学生と錦華殿、
1921(大正10)年、京都女子学園蔵

一九〇四年に烏丸高辻の因幡堂内に開校した高等家政女学校（現京都文教中学・高校）は、幾度の廃校の危機を乗り越えて一九一六年に四条寺町を少し下がったところの大雲院内に拡張移転し、その八年後の一九二四年に高女に昇格して、家政高女になりました。家政は浄土宗系ですね。この頃、家政高女は生徒数が急増しますが、新校舎建設には新しい用地を取得して、しかも建設費用を集めなければなりません。その苦難を乗り越えるべく尽力したのが第三代校長の大島徹水で、この資金集めのすごさは当時の新聞でも紹介されました。結局、一九三四（昭和九）年に左京区の現在地、東大路の仁王門を少し

一五 「錦華殿」は一九八一（昭和五六）年に老朽化のため解体されましたが、二〇〇〇（平成一二）年に京都女子学園のシンボルとして復元再建されています。

一六 少し後の統計ですが、一九二六（大正一五）年には六〇三名（四年制）が在籍しており、これは市内の私立高女（本科のみ）では最多です（京都教育社編『最新京都学校案内』カワイ書店、一九二七年、五二―九二頁）。ちなみに同年には、女専にも五〇三名もの学生が在籍していました（同上七四頁）。

⑦ 家政高女の鉄筋校舎、1934(昭和9)年、
『家政学園創立六十周年記念』(1965年)19頁より

岡崎の方に入ったところですね、そこに三階建ての鉄筋校舎が無事建てられ、移転しました（史料⑦）。この鉄筋校舎は現在でも校舎として使用されていて、校舎の入口には大島徹水の胸像があります。立派な胸像なのですが、校地内にあるので、観光に行こうと思っても一般の方はおそらく入口で守衛に阻まれます。ちなみにこの校舎は、同じく戦前に建てられた平安高女の校舎とともに、現存する元高女の貴重な鉄筋校舎、学校建築となっています。

実は、ファンタジー少女マンガの舞台にもなっています[一七]。

この時期には、全国的には前の時期よりも格段に高女の数が増えています。今まで高女が無かった地方にも高女が設置されていったからです。京都は都市部なので、増加のペースは前の時期とそれほど変わりません。一九一八（大正七）年には伏見町の丹波橋に、今の京都教育大学附属桃山中学校の場所ですが、京都府女子師範学校に併置して府立桃山高女（現府立桃山高校の一部）が開学します。一九二二（大正一一）年には、室町高辻を西に入ったところ、後の成徳中学校の場所に、市立第二高女（現市立二条中学）が誕生します。数年後の一九二八（昭和三）年に現在の二条中学校の場所に移転して、二条高女と改称します。この時、市立第一高女も堀川高女と改称しています。翌年の一九二九（昭和四）年には伏見町立女子手芸学校が実科高女に昇格し、一九三一（昭和六）年の伏見市の京都市編入で、市立伏見実科高女になります。伏見の実科高女は場所をきちんと調査できておらず、よくわからないのですが、おそらく現在の伏見中学校の一部分にあたるかと思います。

私立は、一九一五（大正四）年に平安女学院（現平安女学院中学・高校）が平安高女に、華頂女学院（現華頂女子中学・高校）が華頂実科高女に昇格しています。一九二四（大正一三）年には先にお話ししました家政が高女に昇格、同年に明徳女学校（現京都明徳高校）も高女に昇格しています。平女は、一八七五（明治八）年に大阪の川口居留地で開校した照暗女学校をルーツに持つ敬虔なカトリックの学校で、先ほどお話しした訓令一二号をいったいどのように受け入れたのか気になりますが、詳しいことはわかりません。ただまあ平女といえば、全国初のセーラー制服が有名なようです。一九二〇（大正九）年に制定されたのは冬服だけですが、この制服（資料⑧）はたいへん好評で、他校生からも羨望視されたようです。その後、一九二九（昭和四）年に、冬服に赤いスカーフ、夏服に青いスカーフをネクタイ結びでつけることとされます。ほかにも、体操着としてちょうちんブルマーを着用することが決められるなど、平女は常に学生服において時代の最先端にいたようです。ちなみに、平女のセーラー制服はワンピース型でして、一九二一（大正一〇）年に制服として制定された福岡女学校や金城女学校（愛知県）のツーピース型セーラー服とは異なります。一九二〇年代後半から全国的に一気に広まったセーラー制服はツーピー

⑧ 平安高女のセーラー制服、
1920(大正9)年、
平安女学院『写真で見る125年史』
(2000年)41頁より

一七 このいきさつは、藤原ヒロ『ユキは地獄に堕ちるのか①』（白泉社、二〇一四年）五九―六〇頁をご覧ください。

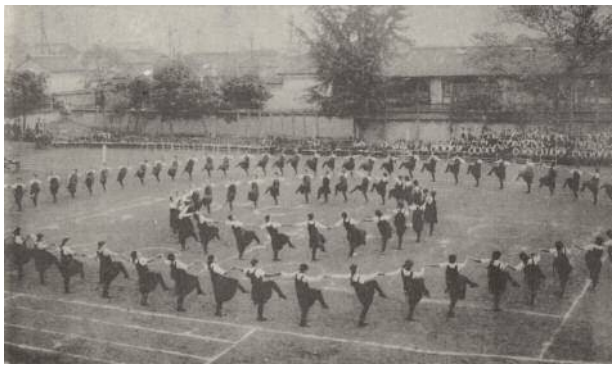
⑨ 華頂高女の受戒、1937(昭和12)年、
華頂高女『校友会誌』(1937年12月)扉写真より

ス型の方でして、こういった意味では平女の制服は非常に独特なものだったといえます。このあたりのセーラー制服の広まりは、去年卒業した京女の学生が非常にすぐれた卒業論文一八を書いており、たいへん勉強になりました。次、華頂高女ですが、開校からずっと知恩院前の現在地にあります。同じ浄土宗系の女学校の家政高女がすでにそれなりの勢力を持っていたこともあって、一度は廃校が決定しかけたようですが、存続の道を選びなんとか一九一五（大正四）年に実科高女に昇格して、四年後に「実科」がとれて華頂高女になります。全国的にみると、実科高女に昇格して数年後に高女にまた昇格する「二段階昇格」パターンはよくありますが、京都市内では華頂が唯一です。浄土宗系の学校では「受戒」という行事があり、だいたいどこの学校でも学校内の講堂のようなところでやるのですが、華頂は本山のふもとにあるので本山まで歩いて行って、そこでやるのですが、その写真が圧巻です（資料⑨）。女学生と言ったら、なんだかアニメ化されたかわいらしいキャラやＮＨＫの連ドラに出てくる女性が思い浮かべられるようですが、史実を考えるにあたっては、私学ごとの特色ある女学生の存在を忘れてはいけません。明徳高女は、五条猪熊に一九二一（大正一〇）年に開校した日蓮宗系の明徳女学校が前身で、この女学校はお寺の中のいわゆる「子守り学校」、つまりお手伝いや年少労働で子守りをしている女子のための学校が、さらにその前身になっています。子守り学校として出発し、高女になった、こちらも現京都市域における唯一の学校です。ちなみに当時は、京都女子手芸学校（現京都橘中学・高校）がすでに府庁を上がったところの中立売西洞院にありましたが、この学校は規制の多い高女にはあえてならず、三年制の手芸学校を母体として規模を拡大していったようです。最初の方で触れた同志社女学校と、この女子手芸学校は、高女に匹敵するというか一部の高女を凌駕するくらい大きな規模の女学校でした。

現代のような学校風景が誕生したのも、一九二〇年代後半から三〇年代にかけてです。繰り返しになりますが、制服が袴から洋装に変わったのが最も象徴的です。たとえば、企画展のチラシとポスターに使っている写真ですが（資料⑩）、府二生の、左が一九二〇（大正一一）年、右が一九三一（昭和六）年頃に

⑩ 左：府立第二高女生、1920(大正9)年、個人蔵
右：府立京都第二高女生、1931(昭和6)年頃、個人蔵

一八 土川真実「大正・昭和期におけるセーラー服の普及」（京都女子大学文学部史学科卒業論文、二〇一三年一二月提出）。



⑪ 市立第二高女のダンスオブウェーブス、
1926(大正15)年、此の花同窓会蔵

⑫ 京都高女のフォークダンス、
1938(昭和13)年、京都女子学園蔵

撮影された個人写真ですね、これを比べると、一目瞭然でしょう。右の洋装の方は、今でも制服として違和感がありません。ちなみに本人が生前に娘さんに語っていたところによると、これは当時流行っていた改造服らしく、確かに当時の卒業写真を見たら微妙に違ういろんな制服が見られます。さて、洋装化の歴史にも学校固有のものがありまして、中には、運動が盛んだった市立第二高女のように、体操着だったチューニックが制服になるケースや（資料⑪）、京都高女のようにこの時の洋装制服が現在の中学の制服にほぼそのまま引き継がれている学校もあります。制服以外にも、当時の高女生の日記やノート、学校生活に関する証言、様々な写真からは、一九三〇年代には授業形態、休み時間の過ごし方、通学風景などが、現代とさほど変わらないものになっていたことがわかります。たとえば、資料⑫は一九三八（昭和一三）年の京都高女の運動会でして、フォークダンスの様子を校舎から写したものです。戦後の新制中学校や・新制高校での風物詩・フォークダンスは、高女ですでに広まっていたのです。資料⑬は、一九四一（昭和一六）年の市電「堀川蛸薬師（女学校前）」の停留所です。下校時に撮影され、電車を待つ堀川高女生が象徴的です。今は川が暗渠になり、停留所は市バスのになっています。

⑬ 市電停留所「堀川蛸薬師(女学校前)」、
1941(昭和16)年、堀川高女1942年卒業アルバムより

一九三〇年代には新たな高女が誕生しませんが、一九四〇年代になるとまた誕生ラッシュが到来します。京都成安女子学院高等女学部（現京都産業大学附属中学・高校）が一九四〇（昭和一五）年に京都成安高女に昇格し、同年、光華高女（現京都光華中学・高校）が新設されます。翌一九四一（昭和一六）年には府一の校舎内に府立嵯峨野高女（現府立嵯峨野高校）が誕生し、翌年に現在地に移転します。最初の方でお話ししたように、訓令一二号というものがありまして、高女に昇格するためには宗教教育をある程度断念しなければならないのですが、戦争末期の一九四五（昭和二〇）年四月についに同志社高等女学部が高女になり、同志社高女と改称します。その際には様々な葛藤があったかと思われますが、詳細はわかりません。

女学生といえば、きらびやかで上品なイメージがありますが、戦時下では制服としてもんぺの着用が強制され、学徒勤労動員（学徒＝学生・生徒の略称）などで高女生が戦力として駆り出されたことを、忘れてはいけません。

まず、日中戦争開戦の翌年、一九三八（昭和一三）年から、夏休み期間に三日から五日の勤労作業が課せられるようになります。翌年には勤労作業が正規の授業時間にも行われるようになり、授業に準じた扱いをされるようになりま

⑭ 明徳高女生の霊山護国神社参拝、1942(昭和17)年、京都明徳高校蔵

した。でもまだ、これらの「作業」というのは、生徒を労働力として期待してというよりも、「勤労」を通した精神教育のためとして実施されていました。

一九四〇（昭和一五）年からは「ぜいたくは敵だ」という風潮が強くなっていきます。あらゆるものの画一化・均一化が進んでいくのです。翌年には、一部の例外を除いて制服からスカートが消え、もんぺの着用が義務付けられます。上着も、全国の女学校で統一された、ヘチマ襟の個性のない制服へと次第に代わります。同年一二月の対英米開戦は、この風潮をさらに後押ししました。写真⑭は、一九四二（昭和一七）年二月に明徳高女の女学生が東山の京都霊山護国神社を参拝した時の写真です。このようなイベントがあること自体が戦時下の特徴なのですが、服に注目すると、下がもんぺになっています。制服にあこがれて高女に入った女学生たちは、戦争が終わるまで、あこがれの制服をまともに着て登校することができなくなったのです。

一九四三（昭和一八）年六月に、「学徒戦時動員体制確立要綱」というのが閣議決定されました。ここから、本格的な学徒勤労動員が始まります。この後、矢継ぎ早にこの学徒勤労動員に関する要綱や法令が定められていって、高女生たちは各学校・各学年で決められた工場などへと動員されていきます。写真⑮は、工場に配属された、一九四四（昭和一九）年頃の家政高女の生徒です。頭には工場の帽子、右胸には「学」の字のバッジを付けています。さらに、各高女には学校工場が設けられ、校内での「動員」も行われました。写真⑯は、同年の平安高女の学校工場の様子です。生徒たちが「神風」と書かれた日の丸の鉢巻きをしていることが分かります[一九]。

⑮ 家政高女の勤労動員の制服、1944(昭和19)年頃、『家政学園創立七十周年記念誌』(1974年)42頁より

⑯ 平安高女の学校工場、1944(昭和19)年、平安女学院『写真で見る125年史』(2000年)41頁より

一九 高女生の勤労動員については、平安高女四九回卒業生（一九四五年三月卒）の方々が当時の教員とともに編まれた『思い出の記』（非売品、一九九八年）や、市内の高女ではありませんが福知山高女の記録がたいへん参考になります。後者は、京都府立福知山高等女学校第三八回生学徒勤労動員を記録する会編『少女たちの「出陣」』（文理閣、一九九五年）として出版されています。また、桃山高女生が戦時体制に次第に動員されていき、勤労動員先で空襲を受けたことを、京都府立桃山高等女学校昭和二〇年第四学年卒業生『友垣の譜 伊丹動員の回想』（一九九七年）、及び中川文枝『紅の道 吾、桃陵に刻みし日々よ』（為國印刷、一九九八年）三〇―七七頁で知ることができます。

戦後になっても、すぐに高女がなくなるわけではありません。最後に、京都における戦後の教育改革期のお話をしましょう。

まず、一九四七（昭和二二）年五月に、新制中学校（以下、中学校）が誕生します。京都には第一軍団という進駐軍の本丸が置かれまして、教育改革が徹底されます。その「徹底」の中でも優先されたのが、義務教育・男女共学としての公立中学校の設置でした。これは、従来の小学校を中学校に転用したり、民間の土地を融通してもらって突貫工事で木造の新設校舎を建てたり、そして旧制の中等教育学校、高女や旧制中学校、商業学校などですね、これらの校舎を転用したりして、とにかく一斉開校させた、今日ではあまり知られていない、かなりドラスティックな教育改革です。後の世に与えた影響を考えれば、明治二年の番組小学校創設に匹敵するかと思います。京都がその先進地になったという点でも共通していますね。この時に中学校に転用されたのが、二条高女、伏見実科高女、嵯峨野高女です。嵯峨野高女は今の嵯峨野高校にそのままなったのではなく、一九五〇（昭和二五）年までは市立嵯峨野中学校でした。二条と伏見実科は先にお話ししたように、二条中と伏見中（の一部）になります。二条中は高度成長期に校舎が建て替えられましたが、その時にはきちんと正面が二条高女の校舎をモチーフにしたものになっています。これは、校舎の敷地内に入らなくても見ることができます。

中学校が誕生した翌一九四八（昭和二三）年の四月には、新制高校（以下、高校）が誕生します。さらに同年一〇月には高校再編が行われます。つまり、高校は二段階にわけて教育改革がなされたのです。一年間で二度「転校」された方がたくさんいらっしゃいます。ちなみに、中学校も高校も、旧制の中学校・高校とは全く別物だと思っていただければよろしいかと思います。特に、公立高校が原則として男女共学になった点は[一〇]、当時の高校進学率が五割を切っていたことを差し引いても、日本近代教育史上特筆すべき大改革と言ってもよいでしょう。これによってほとんどが男女別学の学校だった私学の立ち位置も明瞭になるわけで、当然、戦後の公立高校男女共学化の進展は、男女別学の選択肢である私学の存在抜きには語れない、中等教育の大改革だったわけです。一年ほど前に企画展で「青春と学校生活 ―戦後京都の中学・高校生活―」というのをやりましたが、そこではこのことに簡単にしか触れることしかできませんでした。今回の企画展でも、最後のところでちょっと触れた程度です。いつか、戦後の教育改革をきちんと振り返る企画展をしたいなと思っています。

話を戻しましょう。高校の誕生によって消えた高女は、府一・府二・堀川です。府一は鴨沂高校に、府二は朱雀高校に、堀川はそのままの名称で堀川高校になります。進駐軍の意向が色濃く反映された一連の教育改革では、ナンバースクールが学校間の序列を生むということで、ナンバースクールの改称が迫られたからです[一一]。市立の高女はすでに地名が校名になっていたので、二条にしろ堀川にしろ、校名が残ったのです。ちなみに商業・工業の学校はナンバーがとれて、第一商業学校が西京高校（後の西京商業高校、現西京高校）、第一工業学校が洛陽高校（現洛陽工業高校）などとなります。

いきさつが非常に複雑なのが、桃女です。そもそも女子師範学校に併設だったので、この改革の時に建物は京都師範学校女子部に統合され、一九四九（昭和二四）年に京都学芸大学（現京都教育大学）桃山分校になります。場所としては、現在は京教附属桃山中学になっています。桃女のグランドからは、京阪と奈良電（現近鉄）がクロスするところがすぐ目の前に見えたのですが、現在でもそうなのでしょうか。ちなみに学校の中身は、旧制桃山中学校の後身でもある府立桃山高校が引き継いだという形になっていますが、何を引き継いだのかはよくわかりません。ちなみに桃女に通っていた生徒が桃山高校に通うようになったのではなく、後に「三原則」と呼ばれるうちの二つ、総合制と地域制

一〇 この改革は京都では一〇月の高校再編で断行されます。ただし、京都から離れたところでは改革が遅れ、しかもあいかわらず男女別学のままの公立高校が、いくつか誕生します。

一一 この点でも、京都は徹底されました。京都から遠く離れたところでは、ナンバースクールのままの高校が現存していたりします。

（小学区制）がありますから（残り一つは男女共学制）、元桃女生はそれぞれ地元の高校へと再入学するわけです。ちなみに地域制は戦後に誕生したのではなく、戦中からの継続ですが、男女共学になったことなどで校区割はかなり変動しています。なにしろ、戦後の教育改革は非常にややこしい。詳しくお知りになりたい方は、この時期の京都を舞台にした『戦後公教育の成立』[二三]という本がありますので、是非お読みください。

私立高女は、ほとんどがそのまま女子中学・高校へと移行しました。各学校の年史ものなどを読みますと、教育改革にあわせて、一九四七（昭和二二）年が中学開校、翌年が高校開校となっています。京都では、同志社の中学と高校が一九五〇（昭和二五）年にいちはやく共学化しますが、それ以外の元中等普通教育の学校は、男子校・女子校のままです。立命館が男女共学になるのはずっと後の一九八八（昭和六三）年で、これはむしろ二〇〇〇年代に相次ぐ私学の男女共学化の先駆けと位置づけられるかと思います。話を戦後に戻しますと、京都の老舗高女が二校、戦後の時期に廃校になっています。まず菊花高女ですが、この学校はもともと上京区の大宮寺ノ内にあったのですが、烏丸今出川に移転して、すぐにまた、桃山御陵の近くに移転します。昭憲皇太后から下賜金を頂戴し、御大典用の建物を拝戴するなどして当時としては至極立派な校舎を構えた、皇室とのつながりが強固な学校だったようです[二三]。それがあってか、戦後の教育改革の中で軍政部のケーズ課長、当時を知る人は「ケーズいけーず」や「ケーズ旋風」という言葉を一度は聞いたことがあるかと思いますが、それくらい豪腕を奮って改革を断行したケーズによって、一九四八（昭和二三）年三月に「不適格」とされ、廃校に追い込まれたようです[二四]。もう一校は淑女高女です。この学校がなぜ経営が立ち行かなくなったのか、または何か別の理由があったのかはわかりませんが、一九五三（昭和二八）年に閉校しています。ちなみに、その校舎と土地を市が買い取り、そこに市立紫野高校ができます。

以上、駆け足で全国と京都における高女のあゆみをお話ししてきました。高女というのはまだまだ奥深いものでして、本来ならばこれから休憩をはさんで一校一校、じっくりお話ししたいところですが、それをするとたぶん講演が終わるのが明日の昼くらいになりますので、今日はこれまでにしておきたいと思います。ご清聴、ありがとうございました。

※この講演録は、平成二七年三月一日と二五日に京都市学校歴史博物館で開催した同名の企画展関連講演会の録音をもとにしています。資料は主に各学校の記念誌や年史もの、当館及び各学校所蔵の史料を活用しました。煩雑を避けるため、出典を記すことが必要だと判断した箇所に限り、注で明示するようにしました。

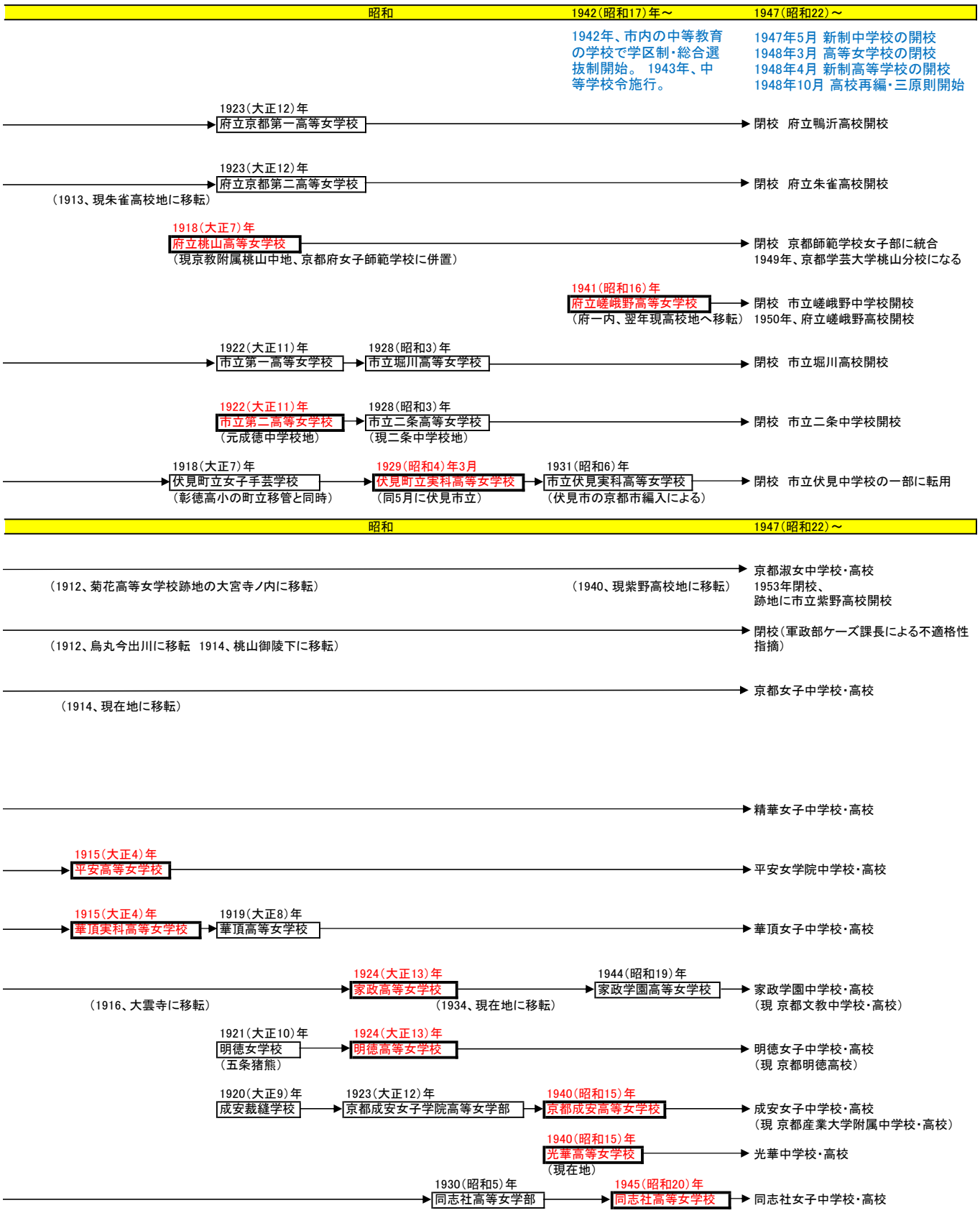
※講演会の最後に、二条高女の同窓会（此の花同窓会）の方々に録音していただいた同校校歌を、みなさんにお聴きいただきました。校歌は、歌える人がいなくなると楽譜と歌詞しか残らず、場合によっては歌詞しか現存しないということにもなります。校歌にかぎりませんが、学校にまつわる無形文化財は、ぜひ同窓会などで機会がありましたら、後世に伝えるためにも「有形」にしておいてください。

※企画展及び講演会の開催にあたっては、高女を前身とする各学校の先生方及び同窓会のみなさま、個人の方からの寄贈や借用、アドバイスに、たいへんお世話になりました。この場をかりて御礼申し上げます。

二三 小山静子・山口和宏・菅井凰展編『戦後公教育の成立　京都における中等教育』（世織書房、二〇〇五年）。

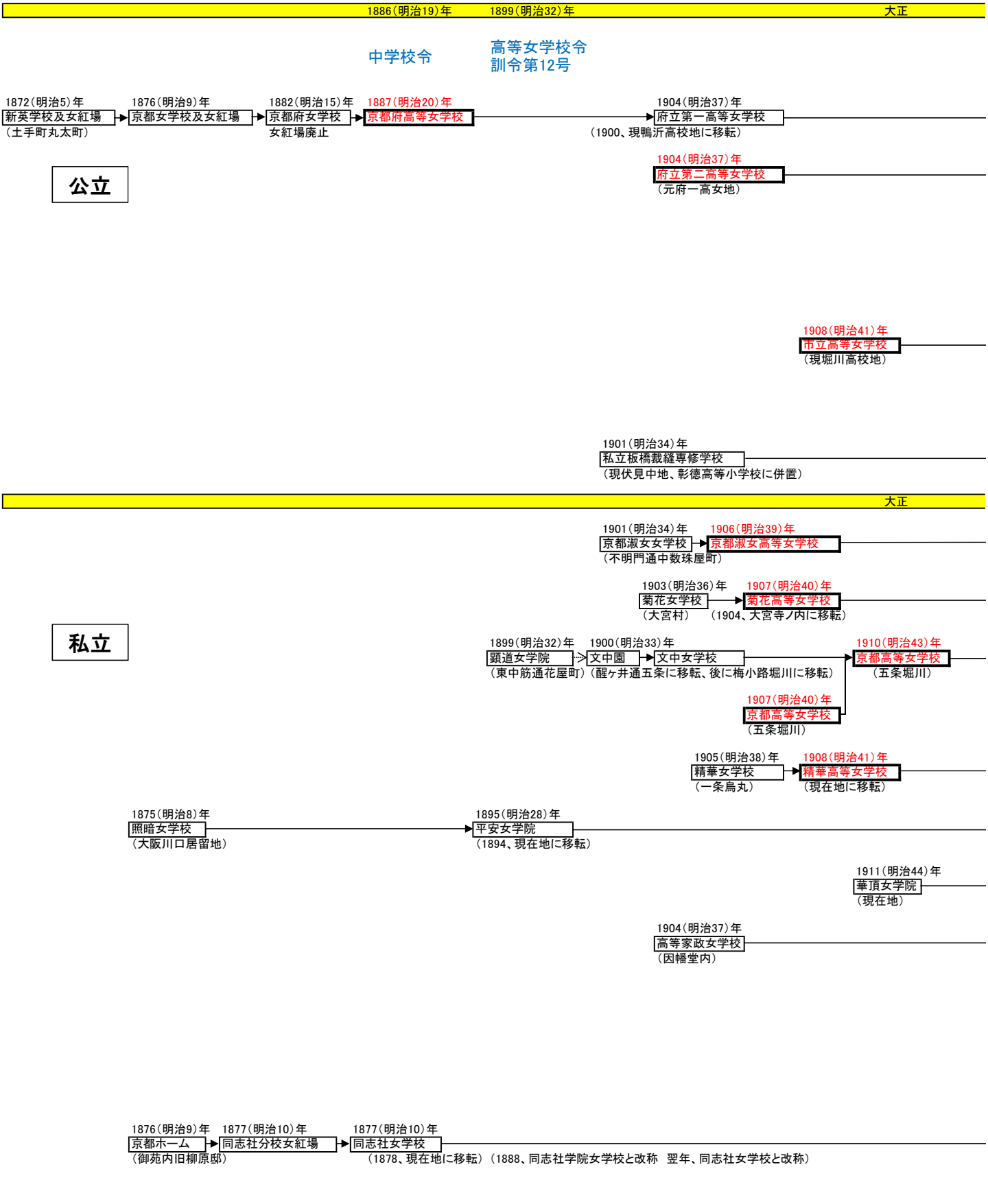
二三 前掲『最新京都学校案内』七七頁。また、菊花高女の学校史については菊花女学校同窓会『川名女史と桃山御陵下の教育』（非売品、一九三二年）が参考になります。

二四 京都府立総合資料館編『京都府百年の年表　五　教育編』（京都府、一九七〇年）二一八頁。


昭和
1942(昭和17)年～
1947(昭和22)～
1942年、市内の中等教育の学校で学区制・総合選抜制開始。 1943年、中等学校令施行。
1947年5月 新制中学校の開校
1948年3月 高等女学校の閉校
1948年4月 新制高等学校の開校
1948年10月 高校再編・三原則開始
1923(大正12)年
府立京都第一高等女学校
閉校 府立鴨沂高校開校
1923(大正12)年
府立京都第二高等女学校
(1913、現朱雀高校地に移転)
閉校 府立朱雀高校開校
1918(大正7)年
府立桃山高等女学校
(現京教附属桃山中地、京都府女子師範学校に併置)
閉校 京都師範学校女子部に統合
1949年、京都学芸大学桃山分校になる
1941(昭和16)年
府立嵯峨野高等女学校
(府一内、翌年現高校地へ移転)
閉校 市立嵯峨野中学校開校
1950年、府立嵯峨野高校開校
1922(大正11)年
市立第一高等女学校
1928(昭和3)年
市立堀川高等女学校
閉校 市立堀川高校開校
1922(大正11)年
市立第二高等女学校
(元成徳中学校地)
1928(昭和3)年
市立二条高等女学校
(現二条中学校地)
閉校 市立二条中学校開校
1918(大正7)年
伏見町立女子手芸学校
(彰徳高小の町立移管と同時)
1929(昭和4)年3月
伏見町立実科高等女学校
(同5月に伏見市立)
1931(昭和6)年
市立伏見実科高等女学校
(伏見市の京都市編入による)
閉校 市立伏見中学校の一部に転用
昭和
1947(昭和22)～
京都淑女中学校・高校
(1912、菊花高等女学校跡地の大宮寺ノ内に移転)
(1940、現紫野高校地に移転)
1953年閉校、
跡地に市立紫野高校開校
閉校(軍政部ケーズ課長による不適格性指摘)
(1912、烏丸今出川に移転 1914、桃山御陵下に移転)
京都女子中学校・高校
(1914、現在地に移転)
精華女子中学校・高校
1915(大正4)年
平安高等女学校
平安女学院中学校・高校
1915(大正4)年
華頂実科高等女学校
1919(大正8)年
華頂高等女学校
華頂女子中学校・高校
1924(大正13)年
家政高等女学校
(1934、現在地に移転)
1944(昭和19)年
家政学園高等女学校
(1916、大雲寺に移転)
家政学園中学校・高校
(現 京都文教中学校・高校)
1921(大正10)年
明徳女学校
(五条猪熊)
1924(大正13)年
明徳高等女学校
明徳女子中学校・高校
(現 京都明徳高校)
1920(大正9)年
成安裁縫学校
1923(大正12)年
京都成安女子学院高等女学部
1940(昭和15)年
京都成安高等女学校
成安女子中学校・高校
(現 京都産業大学附属中学校・高校)
1940(昭和15)年
光華高等女学校
(現在地)
光華中学校・高校
1930(昭和5)年
同志社高等女学部
1945(昭和20)年
同志社高等女学校
同志社女子中学校・高校

京 都 市 内 の 高 等 女 学 校 の 変 遷

〔2015年10月1日現在〕



【主な参考文献（本文中で触れた一般刊行物）】

稲垣恭子『女学校と女学生 教養・たしなみ・モダン文化』（中公新書、二〇〇七年）
柏木敦『日本近代就学慣行成立史研究』（学文社、二〇一二年）
京都府教育会編『京都府教育史 上』（一九四〇年）
京都教育社編『最新京都学校案内』（カワイ書店、一九二七年）
京都府立総合資料館編『京都府百年の年表 五 教育編』（京都府、一九七〇年）
京都府立福知山高等女学校第三八回生学徒勤労動員を記録する会編『少女たちの「出陣」』（文理閣、一九九五年）
京都府立桃山高等女学校昭和二〇年第四学年卒業生『友垣の譜 伊丹動員の回想』（一九九七年）
桑田直子「一九二〇―三〇年代高等女学校における洋装制服の普及過程 ―洋装化志向および制服化志向の学校間差異に注目して―」教育史学会機関誌編纂委員会『日本の教育史学』（第三九集、一九九六年一〇月）
小山静子「高等女学校教育」本山幸彦編『京都府会と教育政策』（日本図書センター、一九九〇年）
小山静子『良妻賢母という規範』（勁草書房、一九九一年）
小山静子・山口和宏・菅井凰展編『戦後公教育の成立 京都における中等教育』（世織書房、二〇〇五年）
小山静子編『男女別学の時代 戦前期中等教育のジェンダー』（柏書房、二〇一五年）
坂本清泉・坂本智恵子『近代女子教育の成立と女紅場』（あゆみ出版、一九八三年）
土川真実「大正・昭和期におけるセーラー服の普及」（京都女子大学文学部史学科卒業論文、二〇一三年一二月提出）
中川文枝『紅の道 吾、桃陵に刻みし日々よ』（為國印刷、一九九八年）
難波知子『学校制服の文化史 日本近代における女子生徒服装の変遷』（創元社、二〇一二年）
藤原ヒロ『ユキは地獄に堕ちるのか①』（白泉社、二〇一四年）
米田俊彦『資料にみる 日本の中等教育の歴史 三版』（東京法令出版、一九九九年）

【主な参考文献（学校史など）】 ※学校または法人編纂のものは著者名省略

・家政高女 『家政学園創立六十周年記念』（一九六五年）／『家政学園創立七十周年記念誌』（一九七四年）
・華頂高女 『華頂学園五十年史』（一九六二年）／『和顔愛語 華頂学園の九〇年』（二〇〇二年）
・菊花高女 菊花女学校同窓会『川名女史と桃山御陵下の教育』（一九三二年）
・京都高女 『京都女子学園八十年史』（一九九〇年）／『京都女子学園百年史』（二〇一〇年）／『写真で見る 京女の１００年』（二〇一一年）
・精華高女 『精華七十年史』（一九七四年）／『精華百年史』（二〇〇五年）
・同志社高女 『同志社女子部の百年』（一九七八年）
・二条高女 此の花同窓会編『懐古録 開校五〇周年記念』（一九七二年）
・平安高女 『平安女学院八十五年史』（一九六〇年）／『平安女学院百年のあゆみ』（一九七五年）／平安高女四九回卒業生（一九四五年三月卒）『思い出の記』（一九九八年）／『写真で見る 一二五年史』（二〇〇〇年）／『平安女学院創立一三〇周年記念誌』（二〇〇五年）
・堀川高女 『創立二十五周年記念誌』（一九三三年）／『あゝ我が青春の堀川』（二〇〇〇年）
・明徳高女 『明徳五十年史』（一九七〇年）

明治二五年 下京高等小学校 修学旅行記

車田 秀樹　和崎 光太郎

修学旅行記

茲ニ明治二十五年十月二十一日ヨリ四日間ヲ期シ我下京高等小学校三四年級男生ノ中百二十三名他ニ附添トシテ先生七人使丁一人合計百三十一名相共ニ大坂（ママ）堺奈良等ノ地ニ向ヒテ旅行セリ蓋シ修学ノ補益ヲ獲〇（解読不可）セント欲シテナリ余ヤ其中ニ加ハル乃チ之か記ヲ作リ後日参考ニ供セント尓云（しかいう）

二十一日　放課後家ニ帰リ用意ヲ整ヘ訣ヲ父母ニ告ゲ便道四五ノ学友ヲ誘ヒ登校ス時ニ午後六時三十分ナリ而シテ同行ノ生徒其既ニ集来セルモノ過半ニ及ビ走リ廻リテ此旅行ヲ楽メリ暫クシテ先生ハ余等一同ヲ男生扣（ひかえ）所ニ集メ交口旅行ニ就キテノ住意（ママ）アリ其中ニ曰ク男子ノ家ヲ出ヅル常必世人ノ敵ニ狙ハルト古人云ヒテ其旅行ヲ戒メタリ子等夫レ能ク之ヲ服膺（ふくよう）スベシト而シテ余ノ愚鈍ハ其真意ヲ全ク了解スル事能ハズ為ニ之ヲ同級生某ニ質ス某曰ク風土異ナル所地ニ遊ブ病魔ニ犯サレ易キ事ナキカ不知案内ノ境ニ至ル事誤リ易キ事ナキカ出入頻繁ノ旅宿ハ物ヲ失フ恐ハナキカ往来雑踏ノ街道ハ悪事ニ遭フノ憂ハナキカ其他斯ノ如クニシテ一々指摘シ之ヲ云ヘバ敵トシテ各自ノ戒慎スベキモノ豈ニ唯七ニシテ止マンヤ況ンヤ下京高等小学校ナル名ヲ冠シ以テ旅行ノ途ニ登レバ一生ノ失敗ハ即全校ノ失敗トナリ一生ノ醜体ハ即全校ノ醜トナリ其関聯スル所ハ常ニ自己一身ニ止マラザルニ於テオヤ古諺ニハ云ヘリ旅ノ恥ハカキ捨ト然レ共此語ハ今日ニ適用スルヲ得ザルナリ是恐クハ先生ノ古訓ヲ引用セラレタル所以カト余此ニ於テ大ニ悟所アリ乃チ始終謹慎ヲ忘レザラン事ヲ期セリ八時ヲ以テ整列シ喇叭ニ和シテ校門ヲ出デ室町通リヲ下（しも）ニ向ヘリ時ニ頭ヲ回ラシテ後方ヲ眺ムレバ次第ニ遠ザカリ行我校ハ今夜ニ限リテ何トナク余等ノ出発ヲ祝シ無事ナル帰校ヲ祈リツツアルモノノ如ク為ニ愛慕ノ念ニ日頃ニ倍セル思ヒアリ既ニシテ歩ハ東本願寺門前ヲ過キ進ミテ竹田街道ヲ南セリ此ニ於テ以為ク去歳修学ノ為余等ノ此路ヲ行クヤ皓々タル大月ハ四方ヲ照シテ夜景ヲ観ルベキ趣ヲ示シ前路ヲ輝シテ足ノ進ムベキ所ヲ教ヘ終始余等ノ良友トナリ迎ヘ且送リタリキ而シテ今宵ハ是全ク之ニ反シ其良友タリシ月ハ未ダ東山ニ温乎（こ）タル麗顔ヲ出サズ為ニ此回ハ暗黒寂寥ニシテ唯遥ニ村里ノ燈火ヲ認ムルノミ之ヲ以テ前キニ常揚セシ所ハ今ハ変ジテ凄涼ノ状トナリ勇ムニ易カリシ道路ハ化シテ渋難ノモノトナリ勇豪類ナキノ人ニアラザルヨリハ此所ヲ歩ミテ必ズ魂飛目眩自二出スル所ナカルベシ宣（むべ）ナリ古来之ヲ以テ旅者ノ難路ノ一　ニ数ヘシ事ナト然リト雖モ余等ノ此行其同伴ノ多キ為ニ勇気ハ鼓舞セラレ喨々（ろうろう）タル喇叭ノ響ニハ促サレ足ノ進ム心之ヲ知ラズ路ノ遠キ意之ヲ悟ラズ遂ニ伏見町南濱ナル淀川汽船会社ニ達ス　時ニ午后十時二十分ナリ暫シ休憩会社役員モ道サカシ三栖（みす）町ナル乗船所ニ至リ第ニ伏見丸ニ投ズ十一時四十五分ヲ以テ発船シ淀橋本枚方等ヲ過グ皆暗クシテ眺ムル能ハズ遺憾ト云フベキナリ衆為ニ無聊（ぶりょう）皆横臥シテ就眠セント欲ス然リ雖轟々

タル機関ノ響ト汽船ノ動揺トハ以テ其過半ヲシテ就眠セシメザルナリ余亦不眠ノ疲労ヲ起サン事ヲ慮リ敢テ神気ノ休養ヲ誡メリ而シテ眠レバ覚メ覚ムレバ眠リ又如何トモスル能ハズ僅ニ数分間世ノ事ヲ忘ルヽノ時ヲ得シノミ斯クスル事之ヲ久フシ森口（ママ）ト称シ大坂ヲ去ル四里ニ近キ所ニ達セリ　時ニ忽チ船ハ大激動ト共ニ其ノ進行ヲ停ム衆怪シミテ之ヲ船員ニ問ヒ始メテ浅瀬ニ乗リ上ゲシヲ知レリ余此ニ於テ機関室ニ至リ其運転ノ状ヲ眺ム船員努力或ルイハ運転セシメ或ルイハ運転ヲ停メ転其進行ヲ計策セリ　而シテ船猶依然トシテ少シモ進行スル事ナシ衆皆愕然心痛セリ暫クシテ船員河中ニ投ジ槓杆（こうかん）ヲ以テ船体ヲ左右前後ニ揺動シ其乗衆ヲシテ或ハ〇（欠字）ニ移シ百方其進行ヲ試ムル事殆ントニ時三十分間暫クニシテ遂ニ之ヲ果ス事ヲ得タリ此ニ於テ余等欣然互ニ其無恙（ぶよう）ヲ祝ス時ニ東天漸ク白ク朝霧朦朧ノ中ニ四山村里ノ景現ハレ意気自爽然タリ乃携フル所ノ行厨（こうちゅう）ヲ開キ之ヲ喫ス其冷飯ノ旨キコト自宅ノ美味ニ優ル又奇ナルカナ河中ヲ眺ムレバ朝網ヲ上ゲントスルノ漁翁アリ両岸ヲ望メバ森林ノ上ニ騒グノ禽鳥アリ之ニ楽ム事数時忽チ東岸ニ当リテ石畳高ク淀川ニ望ミ南北二十町石ヲ画シテ鉄柵ヲ回ラシ数個ノ煙筒天ヲ突キテ黒煙ヲ吐キ規模宏大ノ大厦（たいか）アリ之ニ対シテ東塘一簇ノ古松社殿ヲ擁シ茶店宴席其側ニ連ナシ清潔一區アリ是即一ハ大阪造幣局ニシテ一ハ即櫻花ニ有名ナル櫻ノ宮ナリ又前方ニ当リテ白壁ノ石捱数丈ノ上ニ懸レルアリ大阪城ノ角櫓タル事ヲ知ル而シテ船ハ終ニ八軒屋ニ到着シ余等ノ上陵（陸カ）ヲ促セリ時ニ岸辺既ニ外套ヲ纏ヒ余等ヲ招ケル一人アリ諦視シテ佐藤愛橘先生ナルヲ悟ル聞ク先生ハニ三日前既ニ此地ニ来著（らいちゃく）シ余等ノ為ニト諸処ニ往来シテ参観許否ノ照會ニ労ヲ取ラレシト欣喜（きんき）豈ニ堪フベケンヤ此ニ於テ岸頭ニ登リ盥嗽（かんそう）ヲ終ヘテ正列（ママ）シ天満橋ヲ過グ此橋ハ天満橋（天神橋カ）ト共ニ此地ノニ大橋ニシテ前キノ知事建野卿三氏ノ架設ニ係リ長サ百二十間中央ヲ車馬ノ往来ニ充テ両側ヲ人道ニ供フ其宏壮ニシテ美麗ナル事嘗テ誇言セシ大阪人ヲ咎ムベカラズトナセリ中ノ島ニ入ル此島タルヤ市人ノ公園ニシテ中ニ洗心館アリ自由亭アリ豊国神社アリ廣漠タル芝生ハ其広サ四方三丁ニ余リ捨椅子ハ其間ニ散置セラレ小ナル茶店ハ其傍ニ建チ掃除ハ行キ届キテ清潔ヲ極ム一隅ニ紀念碑アリ表面明治紀念碑ト書シ周囲石柵ヲ以テ囲ム是レ薩肥地方暴徒起レル中討伐ノ軍ニ加ハリ終ニ命ヲ失ヒシ軍士ノ霊魂ヲ吊祀（ちょうし）セルナリ聞ク時々此処ニ於テ盛大ナル招魂祭アリト人云フ死スルモ餘栄アリト是等ノモノヲ称セルナリ更ニ進ミテ砲兵工廠ニ至リ門前ニ待ツ事半時入リテ各所ヲ傍観スルニ幾多ノ機械ハ皆蒸気力ノ作用ニヨリテ回転セリ其ノ中ニハ幾万貫ノ重量ヲ有スルヤ計ルベカラサル大砲ヲ容易ニ虚空ニ釣リテ運搬シ或ハ鉄製ノ大円柱ヲ横ヘテ円管ニ穿タントスルアリ或ハ金属ヲ切ラント構フルアリ消（削カ）ラント試ムルアリ鍛ハントスルアリ磨カントスルアリ皆其事ノ容易ナル恰モ児戯ノ如ク手軽キ事果物ヲ扱フガ如シ其他巨大ナル大砲架上ニ装置セラレ製成スルノ銃剣ハ倉庫ニ列懸セラレ見ルモノ一トシテ呆然タラシメザルモノナシ余此ニ於テ謂ラク是皆一発能ク数十人ヲ一時ニ斃シ幾万頓ノ大艦ヲシテ瞬時ニ覆ラシムベキ鋭利ノ武器ナリ然リト雖我邦三十年以前ヲ考フレバ此器アル事ナク僅ニ木砲或ルモノト弾丸ノ或ル種類トヲ有シ貴重ノ軍器トセリ而シテ今ヤ之ヲ自由ニ使用スルヲ得ルノミナラズ自斯ク盛大ニ製スル事ヲ得ルニ至レリ泰西交通ノ利益夫レ此ニ存ズルカト然リト雖又熟々思フ我ニ此器ヲ有スルヲ得バ彼ニ亦之ヲ防グノ武器アリ果シテ然ラズ此巨砲巨丸モ或ハ小石ヲ投ゲルニ異ナラザルベシ日新月化優勝劣敗ノ世ニ生レタル我々学生ノ励マザルベカラズ亦必ズ此ニ存ズルナリト縦覧終リテ隣レル大坂城ニ入ル抑此城ハ天正十年豊公ノ築キシ所ニシテ元和ノ頃兵燹（へいせん）ニ罹リシト雖徳川氏之ガ再建ト修繕トヲ加ヘシヲ以テ今猶第四師團本営トシテ用ヒル事ヲ得堀深ク塁高ク石崖ニ積メルモノ一　ニシテ数十畳ノ面積ヲ供フルモノ少ナカラズ往々城壁ト見誤ルモノアリ以テ豊公ノ企計ノ大ナリシヲ追想スルニ足ル内堀ヲ渡レバ傍ニ大坂市水道ノ水溜地アリ石階ヲ昇レバ左ニ黄金ノ井アリ猶階ヲ拾フ二十有余ナレバ土畳（ママ）四面ヲ囲メル凹地アリ即チ名高キ天主客（ママ）

趾ナリ一隅ニ一小砲アリ此地ノ午報ニ供フ一端ニ葵ノ定紋アリ徳川氏ノ有セシモノニハアラザルカ此ニ於テ解列休息ス乃チ前方ヲ望メバ大阪市街ハ道路貫通一眸ノ中ニアリ又淀川ハ滔々トシテ其間ヲ流レ自運漕ノ便ヲ此地ニ與ヘ而シテ聳立（しょうりつ）セル煙筒ハ数ノ多キ事数フルニ遑アラズ又以テ此地ノ製造業ニ力ヲ用フルヲ知ルニ足ル顧テ後方ヲ眺ムレバ青田漠々トシテ遠ク相連リ遥ニ金剛生駒飯盛ノ諸山巍峩（ぎが）トシテ雲表ニ聳ユルヲ見ル抑金剛ハ彼南北朝ノ当時楠氏ノ立籠リタル山ニシテ歴史上特ニ名高ク又生駒山ハ神武帝ノ逆賊長髄彦ト戦ヒ玉ヒ軍ハ利ナク皇兄ハ流矢ニ当リテ薨（こう）ジ玉ヒシ処ニシテ宜シク忘ルベカラザル古趾ナリキ正列城内ニ出デ第九聯隊兵営ヲ右ニ練兵場ヲ左ニ見テ進ム恰モ良シ兵士操錬ノ半バニシテ騎馬ノ列ヲナシテ駈ケルアリ歩兵ノ体操ヲナセルアリ其運動ノ整正且活発ナル事流石ニ専務ニ従事セル輩ト感ゼシメタリ又思フ此地ハ是後来余等ノ来リテ兵学ヲ修ムベキノ地ト之ヲ以テ見ル馬聞ク響何トナク慕ハシキ趣アリ行ク事凡そ十余丁高津神社ニ至リ暫時休憩社頭ニ立チテ西方ヲ眺望スレバ幾万ノ屋瓦ノ鱗ノ如キアリ旗幟攅簇（さんそう）セル演劇場アリ相対峙セル両本願寺洋風構造ノ大坂府庁アリ帆檣（はんしょう）林立セル河口アリ又以テ佳景ト称スルヲ得ベシ更ニ進ミテ生玉ヲ過ギ天王寺ニ至ル此寺ハ聖徳太子ノ創立シテ荘厳ナル七堂伽藍及ビ太子堂五重ノ塔アリ又一池アリ亀数百中ニ遊ブ此ニ於テ大阪見物ハ終リトシ南区宗右衛門筋ナル西村音次郎方ニ着ス着スハ井上先生及ビニ十余人ノ生徒ハ既ニ此処ニアリ是高津ヲ発スルノ際ニ当リテ天王寺ヲ知レルモノノミ道ヲ転ジテ早ク来タリシナリ時ニ午後零時十分ナリ乃晝飯ヲ喫ス食后暇アリ余某君ト共ニ千日前ノ知己ヲ訪フ二時三十分宿屋ノ前ニ正列シ歩ム事四丁ニシテ難波停車場ニ至リ乗車シテ堺ニ向フ住吉天下茶屋ノ駅此間ニアリ住吉ニ住吉神社アリ官幣大社ニシテ底筒男表筒男中筒男ノ神ヲ祀リ神功皇后摂政中ニ創建セラル后神功皇后ヲ合祭セリ境内広くシテ老松枝ヲ交ヘ高燈其中ニ立ツ聞ク古来ヨリ船路ノ便ニ供ヘシナリト沿道難波倉庫茶臼山北畠顕家ヲ祀レルノ神社大和川綿糸紡績会社アリ又遥ニ金剛生駒ノニ山ヲ望ムベシ遂ニ下車シ徒歩ニテ堺ノ浜ニ至ル其間路程五六丁傍側ノ家ハ貝細工幷ニ貝殻ヲ鬻賣（しゅくばい）シ海岸ニハ丸三丸万一力茅海（ちぬ）ノ旅宿アリ就中茅海ヲ以テ尤モ高雅ノモノトナス皆海面ニ向ツテ建チ三層若クハ四層ノ楼ヨリナリ夏候炎熱ノ甚シキニ及ンデハ海水浴客四方ヨリ来リ頗ル繁昌ヲ極ムト云フ此処ニ於テ三十分解散セラル衆乃チ咄嗟水際ニ至リ先手ヲ以テ水ヲ掬ヒ之ヲ味フテ曰ク確ニ海水ノ味ヲ知ルト蓋シ京都ノ地タル四面山ヲ以テ囲続セラル之ヲ以テ淡水ノ他得ヲ求ムベカラザルナリ随テ衆多クハ海水ノ醎（かん）ナルヲ聞クモ未ダ嘗めて実験セザルナリ是咄嗟水ヲ嘗ムルニ斯ク急キシ所以ナルベシ百聞ノ一見ニ優ルト古語衆ノ身上ニ適応スベキカ如シ仰キテ眼眸（がんぼう）ヲ放テハ茅海ハ渺茫（びょうぼう）トシテ波浪ナク恰モ鏡面ヲ見ルガ如ク中ニ於テ飄々タルモノハ摂山淡路島ナリ問ヘハ答ヘントシ招ケバ来ラントスルモノハ高石濱ナリ近ク見ユル海中ノ細道ハ波止場ニシテ横ニアル高キモノハ燈台ナリ其風景ノ快濶宏壮ナル惟（誰カ）カ之ヲ賞セサルモノアランヤ況ンヤ余等ノ如キ山景ニ倦（うま）サルモノノ心情ニ至リテ愉々快々シテ禿筆（とくいつ）ノ表示スル所ニアラザルナリ之ヲ以テ衆ハ其楽シキニ堪ヘズシテ或ハ石ヲ海面ニ向テ投ジ以テ腕力ノ強弱ヲ較シ砂地ヲ穿チテ井泉ニ擬シ衣ノ水ニ浸サルヲ知ラズ或ハ海岸ニ立シテ網ヲ下ス舟夫ヲ眺メ潮ノ足下ニ至ルヲ覚ヘス一人ノ鬱悶ニ沈ムモノナシ時ハ既ニ移リ集ムル号令ヲ聞キ愛列ニ就キテ前キ停車場ヨリ汽車ニ乗リ大阪ナル宿舎音治郎方ニ着ス時ニ五時五十分ナリ沐浴ト餐ヲ終ヘ七時三十分ヨリ八時三十分迄千日前心斎橋間ヲ於テ日本橋ヨリ上四町ヲ限リ其区域内ヲ自由ニ散歩スル事ヲ許サル皆欣然トシテ午（ママ　伍の当て字か）ヲ連子テ千日前道頓堀ヲ徘徊シ充分観ヲ尽シテ帰ル九時ニ及ンテ消燈ノ報アリ因テ各寝ニ就ク此行ヤ先生ノ注意ノ至リシヲ以テ就褥（しゅうじょく）后静粛一人ノ言ヲ発スルモノナシ為ニ余ノ如キ寝癖ノ卑シカラザルモノト雖モ容易ニ眠ヲ催ス事ヲ得タリ

二十三日　午前五時喇叭ノ響キニ驚キ起キテ盥嗽ヲ終ヘ朝食後三十分出デテ湊町停車場ニ至リ七時発ノ汽車ニテ奈良ニ向フ天王寺平野八尾柏原王子ノ諸駅隧道ヲ三ヲ過ギテ法隆寺駅ニ至リ下車ス此間平野ヲ越スルヤ小ノ許ニシテ融通念仏寺トテ融通派ノ本山アリ又ハ八尾ニハ久宝寺アリ此寺ハ楠公ノ臣八尾入道ノ住職セシ所ナルヲ以テ著ハル八尾柏原ノ間ニ道明寺アリ管（ママ）公伯母ノ住マレシ所ナリ左方ヲ望メバ遥ニ志（ママ）貴山ノ屹立（きつりつ）セルアリ此山ヤ頂上ニ比沙門天ヲ祭ル聞ク彼ノ楠正成ノ父未ダ子ヲ挙ゲザルノ前此ニ祈リテ正成ヲ生ミ因テ多問丸ト称セルトカ八尾ヲ過クレバ紅葉ヲ以テ有名ナル龍田川アリ下車後徒歩スル事十余丁法隆寺ニ達ス諸寺ハ我邦最古ノ巨刹ニシテ其名世ニ著ハル入レバ直チニ聖霊院アリ前ニ鏡カ池ヲ有ス此池ハ昔時天皇ニ奉ルベキ氷ヲ此辺ニ貯ヘ光熱ヲ防グガ為ニ樹木ヲ植エシ事アリテ一時森カ池ト称セシガ後樹木池水ニ映スル様良キヲ以テ斯クハ改シナリト云フ進メバ金堂アリ本尊ハ鳥佛師ノ作ニシテ傍ニアル画ハ曇徴ノ筆ナリ大講堂現身往生塔ヲ見ル此塔ノ下層ニハ天竺、漢、日本、三国ノ土ヲ以テ造リシ佛像アリテ今ヲ去ル事一千ニ百六十余年前ノ作ナリト傳フ進メバ薬師堂アリ西円堂ト称ス堂内ノ佛像ハ抹香ヲ以テ作リ身ノ長七尺余胎内ニハ金佛アリテ建武元年仏師運慶ノ作其右ニ当リテ建テル上御堂ハ年ヲ経ル事六百十一年ナリト云フ縦覧ヲ終ルヤ再ヒ前ノ路ニ依リ停車場ニ至リ暫時休息スルノ後汽車ニ投ジ十ニ時ニ十五分奈良ニ着ス三条通リヨリ興福寺ニ至リ芝生ノ上ニテ昼飯ヲ食ス前ニ猿沢ノ池アリ奈良ハ景ノ一ニシテ数ヘラル周囲凡ソ二十町余紅鯉数千アリ手ヲ拍タバ来リ集ル衆乃餌ヲ投シテ之ヲ與ヘ余某氏ト共ニ池辺ヲ一周ス道ニ一柳アリ衣掛柳ト称ス傳ヘ云フ采女ノ官ヲ以テ奈良ノ朝ニ仕ヘシ某ナルモノアリ事ヲ以テ高貴ノ御方ヲ恨ミ其極自衣ヲ此柳ニ掛ケ以テ池中ニ投ズ時ノ天皇之ヲ憐レニ思召サレ此処ニ御幸マシマシテ歌ヲ詠シテ其心ヲ慰メ玉ヘリ是此ノ名アル所以ナリト后正列シテ南円堂北円堂ヲ見ル抑南円堂ハ西国札所ノ一ニシテ額面ニ観音歌ヲ掲グ曰ク「春之日ハ南円堂に輝きて三笠之山ニはるるうす雲」ト北円堂ハ其建築南円堂ニ比シテ最モ古ク九百有余年ヲ経シト堂ノ前ニ燈籠アリ其障子ハ小野道風ノ書ヲ彫刻セルモノナリト云フ然レ共今ハ宝物トシテ当寺ニ蔵スル所トナルヲ以テ見ル能ハズ抑此興福寺ハ念仏寺派本山ニシテ最大寺院トナリシモ其后火災ニ罹リ再建ノ運ヒニ至ラズ為ニ仮堂ヲ以テ佛像安置ニ充ツト仮堂ニハ多クノ佛像アリ皆古色蒼然大古ノ遺物ニアラザルト疑ハシム又其傍ニ太鼓（ママ）ノ付属品アリ千九百年前ノ物ニシテ固春日ノ宝物ナリシカ今ハ此寺ノ所蔵トナレリト云フ傍ニ千早城門ノ柱アリ楠公ノ遺物トシテ保存セラル寺ヲ出デ奈良県庁ノ前ヲ過キ凡ソ三丁余歩ミシ時大鹿ノ数十路傍ニ徘徊セルアリ是即チ春日神社ノ境内ニ入リシモノニシテ即此鹿ハ神使トシテ飼養セラルル所ノモノナリ聞ク山中ノ鹿ハ総テ捕獲スル事ヲ得セザルノ禁アリテ・・・若シ犯セルモノハ違警罪ヲ以テ問ハルベシ維新前迄ニ於テハ此鹿若シ或ル家ノ軒ニテ斃セルナドノ事アル時ハ為ニ其戸主ハ厳刑ニ處セル之ヲ以テ奈良市ハ今猶朝早ク起キ出ルノ習慣アリト蓋シ昔時ハ早起我家ノ周囲ヲ注意ノ其斃死シ居ルヤ否ヤヲ巡視若クハ之ヲ認ムレバ他ヘ之ヲ譲ラン事ヲ勉メタル結果ナリト又聞ク此鹿春日山ノ境内ニ於テノミ温順ニシテ境外ニアリテハ人ヲ見レバ忽チ奢走此山中ニ入ルト衆茶店ニアル処ノ餌ヲ求メ之ニ與フ時々尤モ面白ク感セシハ角アル大鹿ノ餌ヲ得ント欲シ其頭ヲ平低クシ礼ヲナスノ様ヲナセリ是ナリ此ノ道ノ両傍ヤ昔時ハ春日野ト称セラレ最廣漠タル原野ナリシカ今ハ樹木枝ヲ交ヘ森々幽暗世外ノ趣アリ然レ共唯左方ヲ眺ムレバ其芝生ヲ鋤起シ木ヲ伐シ地ヲ平ラメ博物館シカモ西洋造リノ数棟ヲ建築セントセリ其或ハ以テ此古雅幽遂ノ境ヲシテ殺風景ノ処ト変セシム事ナキカ進ムニ従フテ鹿ヲ見ル益々多ク彼方ニ大鹿ノ一群アレバ此方ニ子鹿ノ一隊アリ嘶キテ相呼フアリ馳駆（ちく）スルアリ実ニ京阪ノ地否他所（よそ）ニ於テ決シテ得ルベカラザル観ナルベシ又古燈籠アリ密接シテ道ノ両側ニ列ル而シテ其道タルヤ校路アリ近路アリ其石燈籠ノアル事本道ニ異ナラズ之ヲ以テ其数ノ多キ事且其多キ石燈籠ノ一ツトシテ手入ノ居ラザルナキハ未ダ他地方ニ此方アル事ヲ聞カザルナリ世人数ノ多キヲ云フ時往々春日ノ石燈籠ナル語ヲ用フヨリ

製スト其或ハ然ラン遂春日神社ニ達ス（日本三社ノ一）此社祭レルハ神代ノ神ヲ以テス乃一同三拝シ后春日若宮ニ詣テ終テ本社ヲ側面ヨリ見ルハ其長サ二十余実ニ人ヲシテ其宏壮ニ喫驚セシム社殿皆悉ク朱ヲ以テ之ヲ塗ルニ丁程歩シテ三笠山アリ奈良ハ景ノ一ニ居ル此山ハ樹木處々ニ特立シ下ハ一面芝生ヲ以テ掩（おお）ハル又春日山ハ緑樹蔚然（うつぜん）自然ニ人ヲシテ其状ノ異ナルヲ怪シム此處ニ於テ解散シ自由遊戯三十分間許可セラル衆乃此頂上ニ登ラント欲シ競争ス半腹ニ至レバ坂路俄ニ急ニシテ容易ニ歩ヲ進ム事ヲ得ス一歩ニシテ一喘（いっせん）ヲ生ジ若シ艱ヲ堪ヘテ其上頂上ニ至ル此山ヤニ嶺相重リ以テ一山トナル三笠山ノ名アル所以カ之ヲ以テ眞ノ絶頂ニ登ラント欲セバ尚山ヲ越ヘサルヲ得ス余ハ其一ヲ以テ足レリトナシ暫時休息ス前方ハ奈良市街ヲ一眸ニ集メ而シテ其左方ハ春日神社森中ヨリ続ニ其殿頭ヲ表ハセリ中秋三五ノ夜遠ク此山ヨリ月ノ出ルヲ望メハ其景ノ絶佳ナル賞セザルモノナカルベシト云フ彼ノ百人一首ノ歌集ニアル「天乃原ふりさけ見ればかすがなる三笠ノ山ニ出し月かも」ノ安倍ノ仲麿ノ歌ヲ此景ニ云ヒシナリ山ヲ下リテ奈良名物ノ人形かんざし刀剣等ヲ見集レノ喇叭ニテ正列シ進ミテ二月堂ニ至ル此堂ハ十一面観音菩薩ヲ安置ス銅造ニシテ高サ七尺アリト云フ半町程北ニ進ミテ手向山八幡アリ一礼シテ過ク若狭井アリ屋宇其上ニ建テラレ窓戸共ニ閉ツ故ニ之ヲ見ル事能ワス道者云フ此井毎年三月十二日ニ開戸セラル奇ナリト驚クベキハ井中常ニ水ナシ唯開戸日ニ当リテノミ若狭国ヨリ来ルノ此語俄ニ信シ難シ然レ共或ハ地文学上斯カル理由ノ有スル事モヤアラン次ニ三昧堂一名四月堂法華堂一名三月堂祖師堂開山堂念仏堂等ヲ歴覧シ終リテ雲表ニ聳ユル一宇ヲ見ルヲ大佛殿トナス堂ノ右方一口奈良名産蒐覧所アリ過キテ正面ノ入口ニ至リ像ヲ見ント頭ヲ上ケレバ戸帳前ニアリ見ル事ヲ得ズ傍ニ掛札アリ拝観セント欲スル者ハ修繕費トシテニ銭ヲ寄附スベシト書ス乃チ之ヲ出シ入リテ而シテ見ル其大ナル猶想像ノ外ナリキ宜ナリ我国最大仏佛ノ称ヲ受クルカト聞ク其拇指ノ長サ四尺八寸ニシテ大人三人能ク其堂(ママ　掌の誤か)上ニ横臥スルヲ得ト捻テ余等ノ此内ニアルヤ堂ノ柱梁佛ノ頭胞及ビ其蓮台等ニ至ル迨相適応セルヲ以テ比較ノ取ルベキナリ為ニ其大ナル事ヲ特ニ感ゼスト雖拇指ノ寸尺ハ以テ能ク全体ノ大サヲ推知スルヲ得ヘキナリ殿前ニ八角形ノ燈籠アリ之ハ天竺ヨリ持チ帰リタル金銀ヲ以テ造リタルモノナリト然レ共其色青黒ク金銀ト見ル能ハズ是眞物ハ保存ノ為別ニ蔵シタアルカ将金銀ノ唐銅ニ交リ居ルト云フニ過ギスアルカ余ハ之ヲ知ラザルナリ殿前山門アリ其高キ事亦他ニ於テ未ダ嘗テ見ザル所ナリ此門此殿其間ノ地平坦ニシテ甚タ廣シ一同芝生ノ上ニ座シテ師ヨリ分配セラレタル菓子ヲ食ス既ニシテ出ズ行ク事ニ丁余正倉院アリ此院ハ宮内省ノ保護ニ属シ我国第一ノ宝庫ナリト某ガ為ニカ側ニ交番所アリ又巡査ノ院側ニ徘徊スルノ絶ヘザルヲ見ル此処ヲ過タレバ即東大寺ノ正門ニシテ古昔悪七兵衛景清ノ頼朝ヲ刺サントシ秩父重忠ノ為ニ捕ヘラレシ所ナリ次ニ般若寺ニ至ル頽廃ノ甚シキ昔時ヲ想像スル能ハザルナリ然レ共此寺ノ宝物トシテ蔵スルモノノ中ニ長一間半巾四尺ノ天皇ノ御眞筆ナル殿前ニ嘗テ揚ラス大額アリト云ヘバ少シク想像ヲ造ルヲ得ベシ京街道ニ出ツ之ヨリ正列凡一里半余ノ道ヲ徒歩シ木津丁ニ着ス時ニ午后八時五十分ナリ途中ニ奈良坂アリ平ノ重衡ノ斬殺ニ遭ヒシ所ナルヲ以テ著ハル同行ノ宿宿スベキノ旅舎ハ二軒アリ右ニアルヲ河内屋ト云ヒ左ニアルヲ河口屋ト云フ余等右方ノモノニ泊ス此地ヤ僻邑ニシテ出デテ遊ブベキナシ之ヲ以テ沐浴夕餐ヲ終ル後ハ無聊（ぶりょう）慰スベキナシ幸ニ佐藤崇夫井上ノ両先生アリ愉快ニ游泳捕獵槽船及ヒ過根ノ実説ヲ語ラハ九時ニ及ンテ就褥亦世事ヲ知ラス

二十四日　　午前五時褥（しとね）ヲ離レ朝飯ヲ喫シ終リテ正列シ歩ム事一町余木津川ノ岸ニ至リ小舟ニ乗ル六時五十分纜（ともづな）ヲ解キテ八幡ニ向フ船数捻テ三余等船進行甚迅速ニシテ暫時ノ間ニ他ノ二艘相去ル事凡ニ丁ニ及ベリ止所ニ於テ先生舟夫ニ他ノニ艘ト相伴スベキヲ注意セラル両岸ヲ眺望スル土砂広く渉リ其間一モ大石ヲモ見出ス事能ハズ下流ノ洪水ノアルノ毎ニ土砂ノ害ヲ受クルモ免レサル所ナリ船中ニテハ衆観笑談話意ノ向ク處ヲナシ以テ遊ブ拾

時ニ及ンテ師ヨリ分タレシ饅頭ヲ食シ十ニ時前ニ及ンデ辨当ヲ食ス遂ニ八幡ニ達セリ時ニ　十ニ時十分ナリ直チニ上陸シテ八幡町ノ一隅ヲ過キテ男山麓ニ至リ之ヨリ登山ス此道ヤ急ナラズト雖モ永クシテ且石階タリ為ニ汗ヲ流シ足疲ル登レバ男山八幡宮アリ乃一組ヅツ師ニ随テ社前ニ於テ拝礼ス時ハ宮司傍ニアリ来リテ余等ヲ伴ヒ社殿ヲ拝観セシム抑此社殿タルヤ四方各二十四間アリ正面ハ應仁（ママ）天皇右ハ神功皇后左ハ姫ガ大神ヲ祀ル晴和（ママ）天皇ノ本願ニヨリテ之ヲ建テ後ニ代将軍家光公武運長久ヲ祈ラント欲シ今ノ殿ヲ奉建セシト神前ノ囲廊　廟ヲ右ニ行キ仰ギ見レバ黄金ノトユウアリ長サ十三間直径三尺厚サ一寸ニ分アリト云フ少シク進メバ楠六本アリ楠公ノ献セシ所ニシテ昔時ハ十九本アリシト云フ其他見ルモノ聞ク所一々述ベルニ遑アラズ一々宮司懇篤ノ説明ヲ與ヘラレ衆共に満足ノ思ヒアリ社ヲ下リ回道ヲ進ミテ狐ノ渡ニ至リ淀川ヲ越ヘ稲田ノ間ノ小路ヲ経ル事十余町櫻井ノ駅ニ至ル路傍ニ松アリ楠公父子分レノ松ト称ス下ニ石碑アリ行書ヲ以テ楠公訣児ノ處ト書セリ唯此松此石碑其余ニ於テハ一ノ楠公父子ノ遺物ヲモ求ムル能ハスト雖モ右松ノ緑ハ能ク余等ヲシテ楠公ハ貞実ヲ思ハシ恍惚トシテ父子ノ対話セル状ノ現出セシメタリ之ヨリ西国街道ヲ山崎ニ取リ三時三十五分ニ至リテ其ノ地ニ着セリ而シテ余未ダ天王山ヲ知ラズ故ニ以テ共ニ登ル山ハ急ニシテ容易ニ　一歩ヲ進ム能ハズ暫クニシテ難路ヲ樺（よ）ヂ一ツノ嶺ニ達ス路ニ大念寺及宝寺アリ宝寺ニハ聖武天皇幷ニ行基和尚ノ作ト称セラルル十一面観世音菩薩ヲ安置ス側ニ十七士ノ墓アリ聞ク維新ノ際勤王ヲ唱ヘ中途ニシテ死ニ就キシ人々ヲ埋メルナリト墓側ニ一小屋アリ老翁ノ獨リ寝ス余等ノ至レルヲ見テ出テ来リ問フテ曰ク卿等特ニ古憤ヲ弔ハントシテ来リシカト而シテ余等ノ然リル一語ヲ吐クヲ聞キテ欣然色表ハレ篤ク某来歴ヲ語ル翁ノ名九兵衛嘗テ十七士ノ中ナル牧（ママ）和泉守ノ馬丁トナリ恩ヲ受クル事多シ故ニ今之ヲ報セント欲シテ斯ク墓側ニ仕フルモノナリト余其談ヲ聞キテ且其暇ヲ以テ四方ヲ眺望スルニ遥ニ左右ニ当リテハ京都伏見大阪アリ淀ハ眼下にアリテ山城全国ノ水ヲ集メ巨椋池ハ鏡ニ似テ中ニ小舟禾（のぎ）ノ如ク浮ブアリ又前方遥ニ鷲峯山金剛山等アリテ山景水景共ニ供ク快極マリナシ茲ニ於テ一昨々日発伏見ヨリ淀川ヲ下ルノ時ニ於テ遺憾ト思ヒシ我心モ今ハ全ク消失シ余ヲシテ思ハシメタリ見ルヘキモノハ見タリ聞クベキ事ハ聞キタリ家ニ帰ル又遺憾ナシト乃チ停車場ニ至ルベシト命ヲ聴キ悠々手ヲ振リテ心一物ノ曇ナク愉快愉快ニ満タサレテ降ル中途ニシテ集レノ喇叭頻ニ耳底ニ響キニ遭ヒ狂奔至レバ六時十分ナリ三十分ニ至リテ汽車上リ来ル即チ其中ニ載セラレ京都ニ無事ニ着セシ時七時十五分ナリ七条停車場ノ前ニテ人員検査アリ終リテ自由解散因テ自宅ニ帰ル　八時ヲ過グル事二十分ナリ

抑此行ヤ日ヲ費ス事僅ニ　三日半財ヲ費ス事僅ニ円ニ満タズ而シテ地理学史学理学等嘗テ平素学ベル所実験シ其得ル所決シテ少々ナラサルナリ是大ニ余等ノ我校ニ向ツテ謝スル所ナリ

旅行中特ニ感セシハ砲兵工廠ト云ヒ大阪城内ト云ヒ及ヒ八幡社内ト云ヒ皆常人ノ容易ニ入ルベカラザルノ地ナリ而シテ余等ハ悠々入ルヲ得シノミナラズ皆一々懇篤ナル説明ヲ其先導者ニ受ケタル事是ナリ蓋シ思皆以テ余等ヲシテ忠君愛国ノ人タラシメンガ為ナリ果シテ然ラバ余等ハ成長ノ暁ニ及ンデ国利ト民福トヲ計リ以テ国民タル耻ツルナキ價値アルモノトナル事ヲ今日ヨリ丁寧ニ遇セラレ長シテ国家ニ尽スナクンバ其之ヲ何トカ云ハン

（車田）

行程概略

明治二十五年　十月二十一日～二十二日（船中泊）

夜間に学校に集合し、諸注意を受けた後、出発し徒歩にて竹田街道を南下して伏見南浜の「淀川汽船会社」に到着。三栖町より「第二伏見丸」に乗船し、淀川を大阪に向け下る。船中泊の予定のところ途中座礁事故あり。午前二時三

十分に復旧。寝不足の中、大阪城付近に至る。大阪造幣局、桜の宮、大阪城角櫓を遠望し八軒屋の船着場に到着。先発の渉外担当の佐藤愛橘先生と合流。天満橋を経て中之島に入る。西南戦争の戦没者慰霊記念碑を見学の後、「大阪砲兵工廠」を見学。続いて「大阪城」を見学。天主閣跡より大阪市街及び、周辺の諸山を遠望。その後、第九聯隊兵営、練兵場を眺めつつ、高津神社に至る。生玉経由天王寺に到着。南区宗右衛門筋「西村音二郎」宅にて昼食。後、難波停車場から汽車に乗車し「堺」に向かう。下車後「堺の浜」到着後、海に感激し砂浜で遊ぶ。後、汽車にて大阪の宿舎に帰る。入浴、夕食後千日前と心斎橋の間で自由行動。宿に帰り九時に指示を受け就寝。

二十三日

午前五時起床。朝食後「湊町」停車場ヨリ汽車にて奈良に向かう。「法隆寺駅」にて下車し、法隆寺を見学。見学を終え汽車にて奈良に至り、「興福寺」にて昼食。猿沢の池、南円堂、北円堂、興福寺見学。奈良県庁前から春日大社の境内へ。鹿の群れ、春日野、建築中の博物館を見る。春日大社より三笠山に登る。二月堂より大仏殿に至り大仏を拝観。正倉院、南大門を経て、京街道を徒歩にて奈良坂経由、木津に到着。「河内屋」に宿泊。入浴、夕食後、九時に就寝。

二十四日

午前五時起床。朝食後、木津川の岸から小舟に分乗し八幡に向かう。船中で昼食の後、男山山麓へ。登山して男山八幡宮に至り、宮司より説明を聞く。社を下り対岸の「狐の渡し」を経て、櫻井の駅に到着。西国街道に沿い山崎に至る。天王山中腹の宝寺にて蛤御門の変の縁の老人より話を聞く。その後、汽車に乗車し京都に到着。七時一五分七条停車場前にて解散。八時二〇分帰宅。

（車田）

解題

ここに復刻紹介した史料は、明治二五（一八九二）年一〇月二一日から四日間の、下京高等小学校生徒による修学旅行記（以下、旅行記）である。原本は、大阪在住の糸数幸和氏より、二〇一四年一〇月に当館へ寄贈いただいた。復刻公表を快諾されたご厚意にこの場を借りて深謝したい。

（一）この旅行記は、墨筆、和綴七丁（一四頁）からなる。保存状態は良く虫食い等は一切ないが、上から訂正書きされ判読不可能な箇所や、明らかな誤字が散見される。

（二）作者の氏名・年齢は不詳。旅行記の内容から、おそらく高等小学校（以下、高小）の四年級だと推測できる。臨場感に溢れるが誤字が多く、かつ記述が詳細にわたっていることから、修学旅行の熱冷めやらぬ頃に書かれたと推測できる。

（三）博物館所蔵史料という性格上、原文の旧漢字体は可能な限り旧漢字体とした。明らかな誤植、疑問のある箇所には（ママ）を付し、誤植のままだと元の文字を推測するのが困難だと判断した箇所には（推測される元の文字 カ）と記した。

（四）原文にはふりがなが施されていないが、特殊な読み、難解だと思われる読みについては、適宜ふりがなを施した。

（和崎）

解説

（一）史料の意義

旅行記の史料としての意義は、第一に、修学旅行の実態だけでなく、当時の高小生徒の思いをダイレクトに知ることができる点にある。いつどこへ行ったのか、どのような狙いのもとに修学旅行がなされたのかという事実のみならず、具体的な足取

りや天候、見学したもの、途中で起きたアクシデントや旅行者の思いの吐露などの記述からは、背伸びをした生徒の姿や、それなりに作文の素養がある様がうかがえ、外界を知ることへの素直な驚きと喜びが伝わってくる。また、最終部分からは明らかに「国民」としての自覚を読み取ることができ、教育勅語発布から日清戦争開戦までの時期のちょうど中間地点における高小生徒の意識を知ることができる。

高小の修学旅行は明治二〇年代においては珍しく、明治二五年のこの旅行記は希少な発見と言える。なお、浜野兼一は明治二〇年代の小学校においてすでに修学旅行が行われていたこともあった事実を明らかにした上で、「(師範学校の修学旅行のような―引用者)身体の鍛錬という目的よりも慰安的、見学学習的な方向性がより際立った修学旅行」[一]であったと論じている。ただし、そこで根拠となっている史料は学校沿革史や地方の教育会が発行している教育雑誌である。また、増井貴子は学校日誌から明治三〇年代初頭の高小での修学旅行の実態解明を試みているが[二]、学校日誌は教える側の視点であり生徒の修学旅行記とは根本的に史料としての性質が異なる。本修学旅行記は、明治二〇年代の高小における生徒の立場からの修学旅行の実態を読み取ることができる点で、史料価値が極めて高い。これは本修学旅行記に限らないことだが、生徒作成の史料にはどのように教えたのかではなく、何を思い何を学んだのかが記されているという点で、大きな意義がある。

当時の京都、大阪、奈良の風景が生徒目線でリアルに描かれている点にも、大きな意義がある。例えば、明治二五年の大阪。西南戦争の終結で明治政府の支配体制が盤石なものとなり(明治記念碑、招魂祭)、重工業の発展著しい様(砲兵工廠)がありありと伝わってくる(この二年後に日清戦争が始まる)。全体的には、旅行記ではあるものの自然美を描写する記述はほとんどなく、歴史地理的な視点からの叙述が大半を占める。これは、旅行記が書かれた二年後にようやく、自然美という当時としては斬新な対象を論じ大ベストセラーとなった志賀重孝の『日本風景論』が刊行されたということを勘案すれば、当然とも言える。叙述形態は、むしろ従来型の紀行文に限りなく近い。特に、社寺についての言及の多さが突出している。例えば、修学旅行最終日に訪れた大山崎宝寺(宝積寺)では、「十一面観世音菩薩ヲ安置ス側ニ 十七士ノ墓アリ」と、いわゆる勤王志士十七烈士の墓が明治二五年一〇月時点ではまだ宝寺にあったことがわかる[三]。また、墓の側に「小屋」があり、そこには「牧(ママ)和泉ノ馬丁トナリ恩ヲ受クル事多シ」「九兵衛」なる人物が起伏し、旅行記の作者ら生徒に熱くその由来を語っている。

(二)明治二五年一〇月の高等小学校とは

京都では、明治二年に日本初の学区制小学校である、いわゆる番組小学校が開校していた[四]。その後、第二次小学校令施行にともなう府令第四二号にもとづき、市を六〇区に分割したことで京都の自治基盤である学区が六四から六〇に減少し

一 浜野兼一「明治期における小学校の修学旅行に関する一考察――埼玉県の事例を中心とした実態解明への試み――」早稲田大学大学院教育学研究科『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』(第一〇号―二、二〇〇三年三月)一一四―一一六頁。浜野が挙げている小学校は、山本尋常高等小学校(千葉県)、上伊那高等小学校伊那富分校(長野県)、飯能高等小学校(埼玉県)、加茂町立高等小学校(新潟県)、大宮尋常高等小学校(埼玉県)、境町尋常小学校(群馬県)。

二 増井貴子「明治中期学校日誌に見る『遠足』『修学旅行』の原初形態――関尋常高等小学校の事例――」『岐阜県歴史資料館報』(第二二号、一九九九年三月)一六六―一七〇頁。

三 大山崎町歴史資料館の見解だと、墓が現在地の天王山中腹に移されたのは明治二〇年から三〇年頃とされていたが(『京都新聞』二〇一一年八月二九日付一面)、この旅行記により移設は明治二五年一〇月以降ということがわかる。

四 番組小の創設過程及び初期の姿については、和崎光太郎「京都番組小学校の創設過程」『京都市学校歴史博物館研究紀要』(第三号、二〇一四年一二月)、和崎光太郎「京都番組小学校にみる町衆の自治と教育参加」坪井由美・渡部昭男編『地方教育行政法の改定と教育ガバナンス――教育委員会制度のあり方と「共同統治」――』(三学出版、二〇一五年、七四―八七頁)を参照。

たのが、明治二五年である[五]。この年末から翌年にかけて小規模校が統合され、六四校あった元番組小は六〇校になる。統合による新設校は、滋野校、錦林校、仁和校、室町校であり、いずれも当時の上京だった。

明治二五年当時の高小は、尋常小四年級を卒業した後に希望者が学ぶ、全四年級からなる教育機関である。明治一九年の小学校令に基づいて全国に設置されていき、京都には上京下京それぞれに一校が設置された。生徒は、今日の学年で言うと小学五年から中学二年にほぼ該当するが、そもそも当時は学年制ではなく年級制であり単純に比較はできない。

少し詳しく見てみよう。当時のエリート校である尋常中学校・高等女学校への入学は、明治一九年の中学校令で一二歳以上と定められていたので、尋常小を一〇歳で卒業してもそのまま入学することはできなかった。また、一〇歳で高小に入学し、たとえ一二歳で二年級を修了したとしても、それだけでは学力的に尋常中学校に合格することは難しく、合格者は高小四年級まで修了した者、または私塾のような私立学校で学んだ者がほとんどだった[六]。例えば、明治二五年一〇月現在の京都府尋常中学校一年級の年齢は、最低で一二歳、最高で一八歳、平均で一四歳となっている[七]。つまり当時の高小は、学年制が成立する以前の学校であるのに加え、他の中等教育学校と学校階梯上並列した学校ではなく尋常小学校（以下、尋常小）と中等教育諸学校との間に位置づけられ、しかも進学者の進路、進学のあり方ともに複雑である。端的にまとめれば、今日で言うところの小学校でも中学校でもない、近代教育史上特異な学校といえよう。当然ながらそこに通うことのできる生徒は一部の恵まれた階層の子であり、後述するように男女比にも大きな差があった。高小の大衆化が進むのは、明治三〇年代半ばを待たねばならない。

以上のことから、本旅行記の特徴を浮かび上がらせるためには、他の高小の生徒が残した史料との比較検討が唯一の手段となるのだが、管見の範囲ではそのような史料は存在しない。むしろ、今後発見されるであろう同様の史料を位置づけるために、この旅行記が活用されることになるだろう。この点にも、旅行記を復刻公表する意義がある。

（三）修学旅行はいつ始まったのか

修学旅行が法令上初めて登場するのは、明治二一年八月二一日制定の尋常師範学校設備準則である。この法令に基づいて、明治二〇年代半ばには全国の師範学校で定着していく[八]。しかしその内実は、兵式体操をもとにした行軍旅行と未分化であり、行軍と分化するのは鉄道網が全国に広がった明治三三年以降で、その頃からようやく中学校や高等女学校などで広まったとされる[九]。

では、京都の高小ではいつから修学旅行が行われていたのだろうか。管見では、これまで明治二六年の修学旅行に関する二つの記録があった。京都府尋常師範学校附属小学校では、明治二六年から「一泊程度の修学旅行」[一〇]が実施されたとされる。ただし、この旅行の該当者が尋常小の児童なのか高小の生徒なのかはわからない。もう一つは本旅行記の執筆者が通った下京高等小学校であり、『京都小学五十

五　京都市小学校創立三十年紀念会編『京都小学三十年史』（明治三五年）一一五―一二三頁、三上和夫『学区制度と住民の権利』（大月書店、一九八八年）一〇七―一〇八頁を参照。

六　三羽光彦『高等小学校制度史研究』（法律文化社、一九九三年）一〇九―一一〇頁。

七　校史編集委員会編『京一中洛北高校百年史』（一九七二年）一三一頁。なお、当時の同校は経営が大谷派（東本願寺）に委託されていた。

八　当時の師範学校の修学旅行記は、新谷恭明が紹介翻刻した福岡県尋常師範学校生徒の修学旅行日記がある（新谷恭明「明治期の師範学校に於ける修学旅行について――史料紹介・福岡県尋常師範学校生徒の旅行日記――」九州大学教育学部『教育学部紀要（教育学部門）』第四一集、一九九五年三月、四五―五三頁）。

九　佐藤秀夫『学校ことはじめ事典』（小学館、一九八七年）六二―六三頁。

一〇　『京都教育大学教育学部附属京都小学校百周年記念誌』（一九八一年）三八頁。ただしこれが尋常科のことなのか高等科のことなのかは不明。

年誌』における同校沿革には、明治二六年のこととして、「十月三、四年男女生ノ修学旅行ヲ行ヒ伊勢地方ニ至ル。蓋シ本校宿泊旅行ノ始ナリ」[一二]と記されている。旅行記が記されたのはこの前年であり、しかも本文からはさらにその前年である明治二四年にも修学旅行らしき取組みが行われていたとうかがわれる。

なお、明治二五年一〇月の『京都府教育雑誌』からは、尋常師範学校（現京都教育大学）の修学旅行が「地理歴史博物研究」のための五泊六日の奈良方面、商業学校（現西京高等学校）の修学旅行が「物貨の運輸集散商業の実況等を視察」するための三泊四日の大阪・和歌山方面へのものであったことがわかる[一二]。同雑誌は下京高小の就学旅行について触れていないが、三泊四日の大阪・奈良方面への旅行が、尋常小及び商業学校の修学旅行の「広く浅く」を狙ったものだと推測できる。

（四）京都の高等小学校

明治一九年小学校令の第二条に基づく明治二〇年五月京都府令第一〇三号により、同年七月一日に上京区高等小学校（現上京中学校）と下京区高等小学校が開校する。学務委員は同一人物が両校を兼任した。原則、尋常小の卒業者のうち希望者が四年級まで通うこととされた、同一校内での男女別学制の学校である。明治二二年六月の市制実施により、翌七月に両校はそれぞれ上京高等小学校（以下、上京高小）、下京高等小学校（以下、下京高小）と改称。明治三〇年四月に第三高等小学校（現東山開睛館）が創設される際、上京は第一、下京は第二と改称。教育内容については、明治二三年の第二次小学校令に基づいて出された同年の小学校教則に明記されているが[一三]、あくまでこれは「教えようとしたこと」であり「教えたこと」ではない。紙幅の都合上、「教えようとしたこと」は尋常小の発展的内容であったことを指摘するに留めておく。

上京高小は、興文校（室町通丸太町上ル大門町）に併設で創立された[一四]。創立当初の生徒は二九〇名、教員は七名だった。当時の興文学区は、ほとんどの子を師範学校附属小学校（新町出水上ル西側）に通わせており[一五]、高小設置後は残りの子は大路校（小川通下立売下ル西大路町）校舎を間借りしてそこへ通うこととなった。しかし開校の翌月に一年級一八〇名が入学したことで、校舎・敷地が足りなくなり、以後、梅屋校や中立校の校舎を間借りする状況が続いた。明治二五年、興文校は大路校と統合し、大路校の場所に滋野校が開校。同時に、手狭だった上京高小は中立売通室町西入三丁町（現上京中のプールの場所）に新築拡張移転。興文学区は滋野学区の一部となったが、元校舎・敷地のその後は不明である。明治二五年の授業料は月四〇銭（現在の約二〇〇〇～二五〇〇円ほど）、一家で二人目以降の入学は半額だった。全国的にみて、高くもなく安くもない、標準的な額である[一六]。明治二一年から三一年までの卒業生は、男子六二六名（六八・六％）、女子二八七名（三一・四％）。最後の明治三一年の卒業者が男子一〇一名（六〇・五％）、女子六六名（三九・五％）なので、この一一年間で女子比率が上昇したと考えられる。

修学旅行記執筆者が在学した下京高小は、創立当初に独立校舎を持つことができず、永松校に本校、他下京の尋常小三校に分校を併設して開校した[一七]。その後も試行錯誤が続き、単独校舎の設置は明治二五年を待たねばならない。同年五月、高辻室町西入ル繁昌町（元成徳中の地）に敷地を購入し単独の新校舎を建設開始。同年八月（『五十年誌』だと七月）に新校舎に完全移転した。旅行記の舞台となった

一　京都市役所編『京都小学五十年誌』（大正七年）一五三頁。
二　京都府教育会『京都府教育雑誌』（第六号、明治二五年一〇月）四三頁。
三　前掲『京都小学三十年史』三九〇―四二二頁。
四　以下、両校については前掲『京都小学三十年史』七二四―七二五、七五八頁、前掲『京都小学五十年誌』一五一頁を参照。
五　ただし明治二一年四月には尋常師範学校及び附属小学校が寺町荒神口に移転している。移転後に興文学区の児童がどこの学校に通ったのかは不明。
六　前掲『高等小学校制度史研究』四七―四九頁を参照。
七　以下、同校については前掲『京都小学三十年史』七二六―七二八頁、前掲『京都小学五十年誌』一五三頁を参照。

修学旅行が実施されたのは、この二か月後の同年一〇月である。同年の授業料は上京高小と同じ月四〇銭だが、一家二人目以降の割引の有無は不明。明治二一年から三一年までの卒業生は、男子六九六名(七四・二%)、女子二四二名(二五・八%)で、上京高小より若干男子の比率が高い。

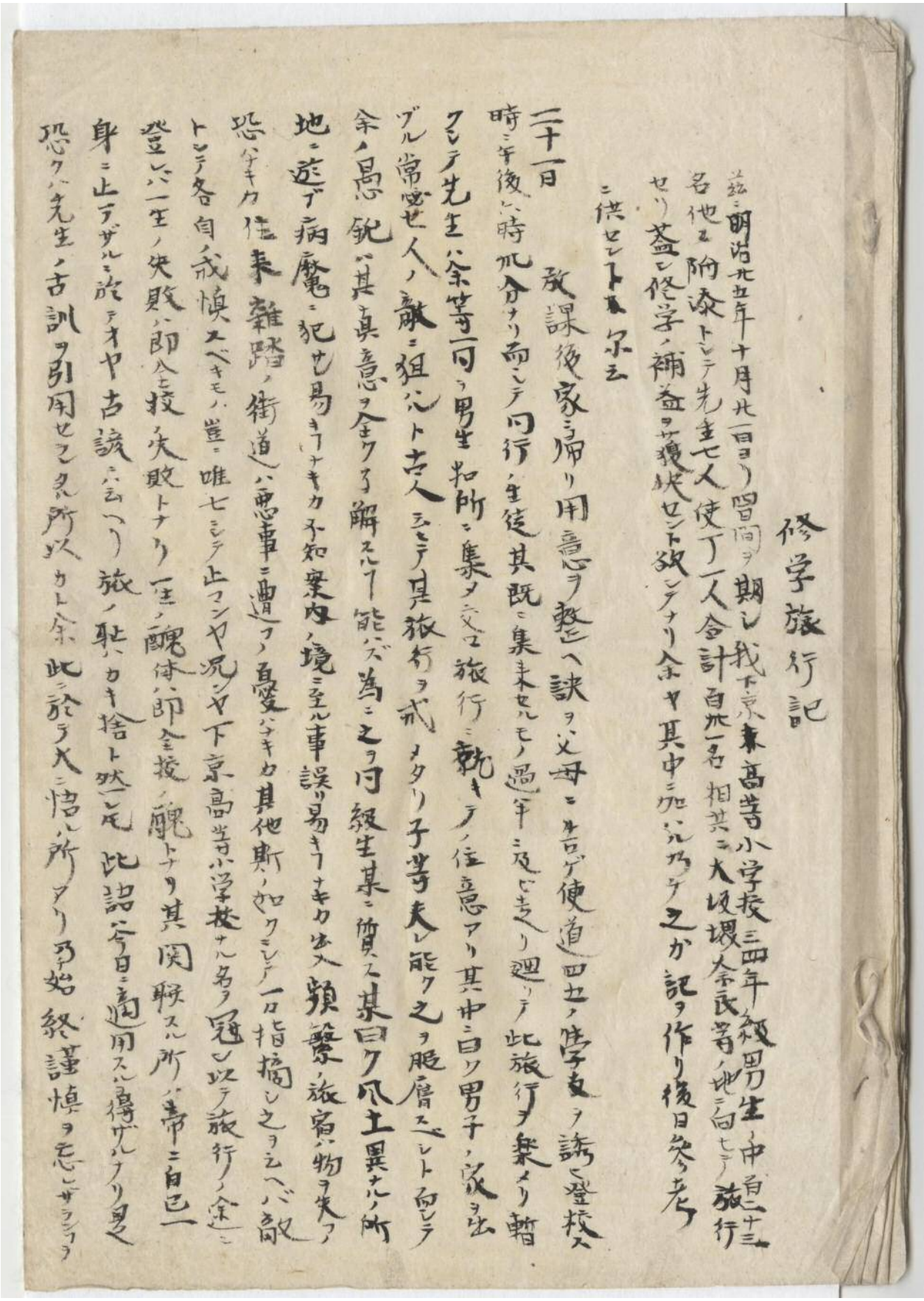
法令などでなく、実態として当時の教育内容を今に伝える同校の一次史料は管見の範囲では現存していないが、明治二四年四月に入学した男子生徒の修了証書が当館に所蔵されている[一八]。明治二四年度までの修了証書の裏は中試験(学年末試験)、卒業証書の裏は大試験(最終学年の学年末試験)の成績表になっており、各学年末で試験を受けた科目と素点、席次がわかる。それによると、明治二四年度の下京高小では尋常小の延長線上にある各科目の他に、英語の存在が際立っている。というのは、英語だけが「綴字」「読法」「習字」「作文」「会話」の五分野に分けて中試験が行われているからである。明治二四年度は前三つの分野のみの試験で、後二つは空欄になっていることから、一年では「作文」「会話」は扱わなかったのだろう。前述したように、当時は高小を卒業しても尋常中学校の入試にはなかなかストレートで合格できなかったが、それゆえか、英語教育への力の入れようはかなりのものだったようである。

(和崎)

※復刻・行程概略は車田が、解題・解説は和崎が担当した。

一八 二〇一四年一〇月に淳風小学校へ調査に行った際に発見した。この生徒は明治一四年九月生まれで、尋常小一年から高小三年までの修了証書・卒業証書が現存している。

下京高等小学校校舎
(大正7年、『京都小学五十年誌』より)



修学旅行記

茲ニ明治九年十月九日ヨリ習同ヲ期シ我下京第高等小学校三四年級男生中百二十三名他ニ附添トシテ先生七人使丁一人合計百九十名相共ニ大坂堺人民等ノ地ニ向ヒテ旅行セリ蓋シ修学ノ補益ヲ獲ント欲シテナリ余ヤ其中ニ加ハルヲ得ルカ記ヲ作リ後日参考ニ供セントス尓云

二十一日　放課後家ニ帰リ用意ヲ整ヘ訣ヲ父母ニ告ゲ使道四五ノ学友ヲ誘ヒ登校ス時ニ午後六時九分ナリ而シテ同行ノ生徒其既ニ集来セルモノ過半ニ及ヒ之リ迎ヒテ此旅行ノ衆メリ輩クシテ先生八余等一同ヲ男生和所ニ集メ文ヲ旅行ニ就キテノ注意アリ其中ニ曰ク男子ノ家ヲ出ブル常密セ人ノ敵ニ狙ハレト古人ニシテ其旅行ヲ戒メタリ子等夫レ能ク之ヲ肝膽ニ銘シテ而シテ余ノ恩釣ハ其真意ヲ全クス解スル能ハズ為ニ之ヲ問ヒ級生某ニ質ス某曰ク凡土異ナルノ所地ニ遊ブ病魔ニ犯サレ易キヲ知ラザルカ又知ラザル内ノ境ニ至ル事誤リ易キヲ出入頻繁ノ旅宿ハ物ヲ失フノ恐アリカ住来雑踏ノ街道ハ悪事ニ遭フノ憂アリカ其他斯ノ如クニシテ一ツ指摘シ之ヲ云ヘバ敵トシテ各自ノ戒慎スベキモノハ豈唯七ニシテ止マンヤ況ンヤ下京高等小学校ハ名ヲ冠シ以テ旅行ノ途ニ登ルハ一生ノ失敗ハ即チ校ノ失敗トナリ一生ノ醜体ハ即チ校ノ醜トナリ其関聯スル所ハ帝ニ自己一身ニ止マザルニ於テオヤ古諺ニ云ハク旅ノ恥カキ捨ト然ルモノ此語今日ニ適用スル得ザルナリ是恐クハ先生ノ古訓ヲ引用セラルル所以カト余此ニ於テ大ニ悟ル所アリ乃チ始終謹慎ヲ忘レザランヲ

修学旅行記(一丁表)

団体見学の実績と課題

― 平成二十六年度を振り返って ―

車田 秀樹　小中 秀則

はじめに

うれしいことに平成二十六年度の来館者数は二万七百三十三人と二万人を越え過去最高を示した。併せて団体見学者数も二十五年度の千五百十四名に対して、二十六年度は千八百四十人に増加した。

これは開設十六年を経過し、次第に市民の認知が進みつつあること、特色ある企画展の実施や、学芸員の執筆による「学びやタイムスリップ」の新聞への長期連載、報道機関との連携のもとでのＰＲなど地道な努力が次第に功を奏しつつある結果といえる。我々が担当している団体見学についても増加の理由を分析・考察し、その中から更なる発展のヒントを見出したいと考える。

見学団体の実績と内訳

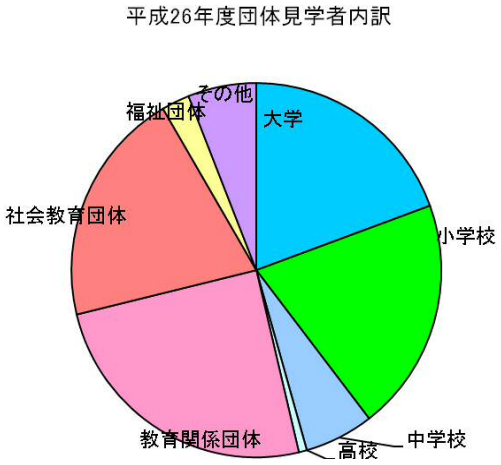
来館団体を分類してみると、大きく学校・教育関係団体とそれ以外の団体に分かれる。そして学校関係でも児童生徒、学生などのグループと教職員・ＰＴＡなどのグループに分けられる。一般の団体としては、社会教育関係、高齢者福祉関係、旅行社の斡旋による見学団体などがある。

平成二十六年度の団体見学の実績は次のとおりである。

総数　事前申し込み見学　六十八団体　見学者総数　千八百四十名

学校教育関係　小学生　児童館　高校生　大学生　教員研修　京都教師塾　ＰＴＡ等　（千三百十名）

一般団体　サークル　老人施設　リハビリセンター　旅行団体　カルチャー教室等　（五百三十名）



平成二十四年度との団体見学者総数の比較

平成二十四年度　入館者総数　千四百五十七名

平成二十六年度　入館者総数　千八百四十名

団体見学者内訳の変化

学校関係の比率は中学校の比率が若干大きくなった。これは他府県からの修学旅行生によるものである。大きく変化したのが教育関係団体で、二十四年度では十四パーセントであったものが二十五パーセントに増加。主たるものとしては教育委員会職員、学校教職員・事務職員研修、ＰＴＡ研修等である。また社会教育団体も七パーセントから二十パーセントへの増加が見られる。内容としては隣保館・公民館の研修、民生委員研

修、社会福祉法人団体等である。このように、児童・生徒・学生という学校中心から、広く社会全般の方々に来館対象が広まってきたと言える。

団体見学対応の工夫

団体見学では解説希望がほぼ百パーセントである。この場合映像ホールでまず施設概要や京都における近代教育成立のあらましを解説をした上で視点を提示し映像資料を見ていただくようにしている。展示物を断片的に見るのではなく、全体の中に位置づけることが、理解を助けると考えるからである。また、解説の際には具体的イメージを持ってもらえるように、人物・建物・かわら版などをパネルにして、紙芝居形式で資料提示をするようにしている。

また、全体の解説後に見学者と共に各コーナーをまわって展示物の意味、見どころやこぼれ話も交えて興味が湧くように、工夫して解説をしている。

見学団体の増加に向けて

団体見学を担当する者としては、来館者の増加はいつも変らぬ願いであり、「来てよかった」、「また次回も来たい」と思ってもらえる事を期待している。最近では年間計画の中に位置づけて、毎年来ていただける学校が増えてきた。また、旅行社も見どころの一つに採り入れて、繰り返し来館していただけるケースが出てきた。このようなリピーターの獲得のためには、その裏付けとなる見学の魅力がなくてはならない。団体見学のあり方はもちろん、館としてのよりよい展示の充実と工夫が求められる。そのためには、学芸員との連携、協力を一層進めて行きたい。

二十六年度中に変化が見られたのは、ＰＴＡ関係団体の増加である。重点的取組としてＰＴＡへの働きかけを、当館の管理職からも組織的にしてもらった成果である。学校の協力団体として大きな組織力、動員力をもつＰＴＡではあるが、残念ながら来館はこれまでそう多くはなかった。そこで、新たな掘り起こしを行い、地域・保護者の絶大な支えのもとで発展充実してきた京都の教育の歩みを、子育て真只中の方々に当館で再確認していただくことは大きな意義のあることと考える。足元の教育の歩みを直接的、即物的に学ぶことは、今後のＰＴＡの大きな活力を生み出すはずである。

ＰＴＡでは、各種研修会を年間計画の中に位置づけ実施している。各校でのＰＴＡ研修もあれば、各支部ごと、あるいは京都市全体のＰＴＡ研修もあり、それぞれの段階で当博物館の見学を研修メニューに組み込むことは可能である。見学研修によって「教育都市京都」の先人の足跡に学ぶべきところは多く、これからも積極的に博物館を活用してほしいものである。そのために、二十七年度は、学校やＰＴＡへの働きかけにより一層力を入れたいと考えている。

終わりに

当館は小規模な施設ではあるが、他に類を見ない特色ある施設であると自負している。小規模は小規模なりに、他館にはない長所がある。それは来館者との距離の近さである。とりわけ団体来館の場合は、親しく説明し、お互いの交流も深められるという顔の見える関係である。「みんなで行って楽しい博物館」、「また行きたくなる博物館」、そんな施設を目指している。

「日本画開拓の時代」の画家（一）

久保田米僊

森 光彦

はじめに

平成二七年四月二五日から六月三〇日にかけて、学校歴史博物館では企画展「日本画開拓の時代――明治を生きた 京の画家――」を行った。開化期を迎えた京都の日本画家たちは、絵画制作と取り巻く環境の変化に対して、どのように日本画の近代化に向き合ったのかを検討しようとするもので、明治期京都画壇で活躍した二〇人ほどの画家の作品約五〇点を展示した。展示では幕末から明治後期までを概観したが、中でも明治一〇年代～二〇年代は京都の画家たちにとって激動の時代であり、博覧会への出品や京都府画学校の設立、京都美術協会の設立、近代産業によって発展した工芸界との連携などによって日本画の近代化が一気に推し進められた。この時期を代表する画家に久保田米僊（一八五二～一九〇六）（図1）という画家がいる。現在ではあまり知られていないが、明治前中期には幸野楳嶺（一八四四～九五）と共に画壇をリードし、第一線で活躍した人物である。明治一〇年代から二〇年代初めには京都を、明治二〇年代には東京を拠点にしながら、フランス、アメリカ、朝鮮にも渡り、日本絵画が近代化を模索していた激動期において、新機軸を打ちたてようと奔走した。近代を代表する思想家、ジャーナリストである徳富蘇峰（一八六三～一九五七）は、米僊を高く評して次のように語っている。

> 君は現代丹青界の覇才也。天資敏妙、加ふるに考察の周到と、学習の博洽（はっこう）（広く通じていること）を以てす。君や流派に於て、株守する所なし。古今を論ぜず、東西を問はず、凡そ自個と触著したるもの、一として参照択採せざるなし[1]。

また、米僊より十二歳年下の竹内栖鳳（一八六四～一九四二）は回想において、「久保田米僊先生は今日では余り重大視されない傾きがあり其点先生は其実価から比較して恵まれない人であるが、然し私達は翁の残した功績と言ふものに就いて、正当な評価を与へねばならないであろう」と語り[2]、米僊の功績が京都画壇にとって重要なものであったことを伝えている。新時代のジャーナリズムで明治の世を席巻した蘇峰や、近代日本画の旗手として京都画壇を牽引した栖鳳が注目した久保田米僊とは、いったいどのような画家だったのであろうか。本稿では、展覧会の準備を通して判明した事実を踏まえて米僊の画業をたどりながら[3]、米僊の作品を紹介したい。

画家への道（一八五二～七七）

久保田米僊は嘉永五（一八五二）年、京都の錦小路東洞院西入に生まれた。父親は料理屋を営んでおり、米僊は一人子であった。幼い頃より画に夢中で、寺子屋でも手習いそっちのけで画ばかり描いていたという。それが高じて一六歳の時、当時京都で飛ぶ鳥を落とす勢いであった鈴木百年（一八二八～九一）に弟子入りすることになったのだが、米僊は将来家業を継ぐ身であったので、これは父に内緒で行われた。面白くてたまらず、画の道に深入りする頃には父親にも知られるところとなり、猛反対されたが、米僊はどうしても画家になりたいと考えるようになっていた。そうした中、時代は明治になり、京都は近代都市を目指して大きく様変わりしていく。産業発展や文化振興な

図1「久保田米僊肖像」石川景蔵編『米僊画談』（松邑三松堂，明治35年）

どを目的とした京都博覧会も明治四（一八七一）年から行われるようになったが、こうした博覧会では美術工芸の奨励も熱心に行われた。同六年開催の第二回京都博覧会では書画の陳列場を設けて展観を行い、同時に席上揮毫が企画されており、そこには塩川文麟（一八〇八～七七）、森寛斎（一八一四～九四）、鈴木百年などの諸流派の大家やその弟子など在京画家五〇名が参加した。この参加画家に、二二歳だった米僊の名前がある。同じく揮毫に参加した今尾景年（一八四五～一九二四）、鈴木百僊（のち松年）（一八四八～一九一八）と共に、若くして鈴木百年門下を代表する画家になっていたことが分かる。こうして京都画壇を代表する画家の仲間入りを果たした米僊であったが、父親から晴れて画家になることが許されたのは明治一〇（一八七七）年、二六歳のときであり、それまでは援助もなく、高価な画材や、時には生活費を自らの画を売って調達しなければならなかった。ところが維新後のこの時期は、京都の画家たちにとっては非常な苦難のときであった。幕末からの政情不安、禁門の変による市中大部分の焼失、東京への奠都により人口が減り、宮廷、町衆、寺社などを含めた京の町全体が衰微して従来のように画が売れず、多くの画家が貧窮を極めたからである。江戸期から続く流派の大家であっても食うに困ってもうせん（毛氈）の上に画を並べて売った話などが残っている。一方で作品に用いられる技術よりも筆者の優れた精神や人格を重要視する南画が大流行していたこともまた、写生画派に大きな危機感を抱かせていた。米僊もまた、扇絵や、貿易の刺繍の原画を描き、陶器の絵付けをして糊口をしのいでいたような状況であったが、この時期の

図2《園児遊戯図》明治期 元尚徳中学校蔵

経験は、後の米僊の絵画に対する考えを大きく左右するものとなった。絵画にとって社会に必要とされることの重要さを痛感したのである。これからの日本画は、めまぐるしく発展していく近代社会と密接に関わっていかなければ、時代に取り残されてしまうという問題意識が、のちに「社会画家」を標榜する契機であった。この時期から米僊は、日本画の新たな受容の場を模索していく。例えば、明治七（一八七四）年には当時最先端の近代教育施設であった学校に作品を寄贈している。これは、将来の世の中を担う子どもたちの教育において、絵画が必要になるという信念からであった。他にも幼稚園に贈った、園児を描いた作品（図2）などもあり、円山派の描法によって時世粧を表すなど近代施設に合せた新たな試みが見られる。この時期には、四条派の幸野楳嶺なども同じく貧窮を経験しており、米僊と楳嶺はその後盟友として、京都画壇の革新を共に目指していくこととなった。図3はこの頃描かれた米僊、楳嶺、景年による寄合書である。京都の若手画家が新時代を開拓していく、その胎動の時期であった。

京都画壇を背負って（一八七七～八四）

京都画壇の重鎮であった塩川文麟も亡くなり、米僊や楳嶺が画壇の中心で活躍し始めた明治一〇（一八七七）年頃、ようやく父から許しも出た米僊は京都の絵画の衰退を何とかしようと画策する。幸野楳嶺と計って京都に全国初の画学校を設立しようと考えたのである。楳嶺はこれ以前にも、京都で全国初の学区制小学校設立に尽力したという話が残っており[四]、近代教育の重要性を感じていた米僊と意見が一致したのかも知れない。望月玉泉（一八三四～一九一三）、巨勢小石（一八四三～一九一九）らの賛同も得て、米僊が京都の諸大家の所を説きまわったが、一向に賛

図3《牡丹・霊芝・栗図寄合書》

明治期 個人蔵

成してもらえなかった。ついには京都府知事槇村正直（一八三四～一八九六）を訪問し、西洋を引き合いに出して説得したという。この運動は、画学校設立の建議書に結実し、玉泉、楳嶺、米僊、小石の連名で同一一年九月に槇村に提出された。実は同年の八月一五日に、田能村直入（一八一四～一九〇七）によってすでに画学校設立の陳情書が槇村に提出されており、米僊らはこれを追いかける形であった。この時米僊は二七歳、楳嶺は三五歳であったが、個人的に動いていた直入とは別に、次世代の担い手として、京都画壇を代表する立場としての建議であった[五]。そうして明治一三（一八八〇）年、京都府画学校が設立されることとなった。京都府は画学校開校に向けて、府下四三名の画家を出仕に任用し協力要請を行った。出仕は臨時採用の役人の意であるが、京都の中心画家で構成された出仕によって教員が選出されたり、出仕の中から教員が選ばれたりした。米僊もこのうちの一人となり、開校の後は北宗出仕の任についた。画学校には東西南北の四宗が設けられ、東宗は土佐派、円山四条派など写生派、大和絵の類。西宗は西洋画、北宗は北宗画や雪舟・狩野派の類、南宗は南画という区分で教えられた。米僊や師の百年は北宗とされたわけだが、当時は北宗と東宗の境界が曖昧であるなど、区分は明確ではなかったようだ。ちなみに、明治一〇年代までの米僊の作品を見てみると、その画風は実に様々で、江戸以来の決まった流派に分類することが難しいことが分かる。山水では、初め鮮やかな色を用いた穏やかな文麟風山水なども描いたようだが（図4）、米点なども用い、水気を含んだ墨と柔らかい筆致で表す中国絵画風を多く描き（図5・6）、また南画風の作品も残している。人物では、師百年ゆずりの戯画風の人物画（図7）から一瞬の表情をとらえたシリアスなもの（図8）まで幅広い。明治一五（一八八二）年に描かれた《蔦もみじ》（図9）は鮮やかな紅葉がからまる三本の木を画面に大きく並べて描いた作品で、輪郭線は用いずに空気遠近法によって空間の奥行きを表現している。菱田春草が《落葉》によって木の間の奥行きや広がりを描き、朦朧体の表現を世に問う、約三〇年前の作品である。米僊がこれほど自由に、選択肢をもって絵画の学習が行えたのは、師鈴木百年の指導方針のおかげであろう。鈴木百年は特定の流派に属さず、四条派や岸派など諸流派の長所を取り入れて独自の画風を築き、幕末明治に人気を博した京都画壇の新興勢力であった。すでに指摘されているように、ここにおいて、流派という集団での制作によって生じる様式などの特徴が希薄化し、作家の個人的作風が前面に出るようになったことは近代日本画のさきがけであった[六]。百年は弟子たちにも自身の様式を押し付けることはしなかったようで、米僊もまた流派にこだわらず様々な画風を学んだのであった。米僊の学習の対象は、洋画にまで及んだ。本人の回想によると、陸軍省に雇われ写真技師をしながら、洋画家としても活動していた横山松三郎（一八三八～八四）について油絵の研究をしたという。横山は明治政府が行った明治五（一八七二）年の文化財調査（壬申検査）で京都を訪れており、その辺りで接触があったか、あるいは米僊は美濃尾張や武蔵下総など諸国を遊歴しているので、そのときかも知れない。同一二年の第八回京都博覧会において米僊は、日本画と油絵を両方出品している。また、同年には京都の洋画の先駆者とされる田村宗立（一八四六～一九一八）や巨勢小石と共に、油絵の展覧会を行っている[七]。しかしこれ以降米僊が洋画を描いた記録はなく、油絵を描いたのは明治一〇年代半ばまでであったようだ。

画学校開校後しばらくは出仕として働いていた米僊であったが、ほどなくして出仕の任を解かれることになる。それは、国会開設請願に参加したり、立憲政党に加入するなど過激な政治活動が理由であった。世間では言論による自由民権運動が活発になっており、国会期成同盟が開設され、大きく世の中が動こうとしていたのだが、府画学校にとって、政府が認めない活動をしている人間を指導者として置いておくことには抵抗があったのだろう。これ以前から米僊は言論活動を活発に行っていた。

図9《蔦もみじ》明治15年
京都国立近代美術館蔵

時世の進歩を世に伝えるため、京都に新聞を作ることを考え、有志家に説いてまわった。京都府は特に民権運動への言論弾圧が厳しく、新聞も不活発になっていたが、そこへ新風を起こそうとしたのである。そして、京都日日新聞や京都絵入新聞の発刊に尽力し、また、滑稽雑誌の『我楽多珍報』（京都日日新聞社、明治一二年創刊）では、錦隣子の号で狂歌などを寄せたり、ポンチ絵を描いたりしている。

明治一五（一八八二）年、東京で第一回内国絵画共進会が開かれることとなった。博覧会を経験した日本は、海外に対して自国の文化を主張することの重要性を感じていたが、文明開化の風潮により、伝統的な日本画は衰微の傾向にあった。そこで、日本絵画振興を目的として官による公募展が計画されたのである。日本画の振興は米僊のかねてよりの願いであり、共進会の開催は彼を大いに発奮させた。しかし、初め多くの京都の画家はこの展覧会の主意がよく分からず、出品しようとしなかった。例によって米僊は画家を説きまわって出品を促し、京都画壇の参加をまとめた。京都からは、米僊のほか、楳嶺と原在泉（一八四九―一九一六）が審査官として東京へ赴いた。米僊は出品人総代であり、京都画壇を代表する立場となっていた。わずか三一歳のことであった。このときの出品作は、銅印を受賞し、また、画学校設立の効により絵事功労賞を受けている。その後同一七（一八八四）年の第二回内国絵画共進会では、豊臣秀吉の朝鮮出兵時の名古屋陣中での逸話を描いた《朧月夜》が銀章を受賞した。これによって全国に名が知られるようになり、出世作となったのだが、この頃から米僊は歴史画を盛んに描くようになった。近代国家建設のための歴史編纂・教育に伴って、歴史人物の事績を伝えるための図像が世間に多く流通していた時期ではあったが、ナショナリズムの盛り上がりと共に全国的に歴史画が流行する明治二〇年代、三〇年代に対しては先駆的だったといえる。米僊の子である久保田米斎（一八七四～一九三七）の回想によれば、この頃京都において富岡鉄斎（一八三七～一九二四）、幸野楳嶺、北野天満宮の宮司田中尚房（一八三九～九一）、平野神社宮司水茎磐樟（一八五五～一九〇七）らが有職故実の研究会を起こし、米僊も参加していたという[八]。栖鳳もまた米僊の京都画壇への大きな遺産として、有職故実の研究、知識の普及を評価し、著書『絵嶋之霞』を賞賛している[九]。『絵嶋之霞』は明治二〇（一八八七）年に出版された画譜で、時代に応じた武将の風俗や年中行事を示したものであった。軽気球や幼稚園児、郵便制度をテーマにした《郵便現業絵巻》（明治二六年、郵政博物館蔵）など先進的な事物を描きながら、一方で有職故実の研究に励んだ米僊であったが、両者に共通するのは絵画の記録性であり、このテーマへの追求は終生続くものとなった。米僊の歴史画は多いが、《大楠公・義貞公誠忠之図》（明治一五年、石川県立美術館蔵）や《錦御旗奪還図（村上義光図）》（図10）などがある。

京都から日本、世界へ（一八八六～九〇）

明治一九（一八八六）年六月に祇園中村楼で行われたフェノロサ（一八五三～一九〇八）の講演は東京の進歩に対して停滞している京都画壇への奮起を促したもので、京都の青年画家に大きな影響を与えた。これを受け、同年九月には米僊、楳嶺を中心として京都青年絵画研究会が行われた。会が大きく掲げたのは、流派への偏執をなくし、絵画への熱を持つ青年画家が集まる場を作るということであった。この研究会で頭角を現したのが菊池芳文（一八六二～一九一八）や竹内栖鳳で、三五歳の米僊は幹事長という立場であった。米僊や楳嶺が示した流派根性からの脱却という考えはのちに京都美術協会へと引き継がれていくものであるが、これはまさしく鈴木派に学んだ米僊にとって自らの作品で実践していた考えでもあった。こうした土壌が、次世代の個性を育てていくことになる。

さて、この頃米僊は充実した仕事を多く行っており、中でも東京に造営されることとなった明治宮殿（明治二一年完成）の天井画と杉戸絵を揮毫したことが挙げられる。楳嶺と共に手がけた葡萄の間の格天井には四季の花を描き、杉戸絵は《柘榴金衣百子》（明治二〇年、宮内庁蔵）、《薔薇花》（明治二〇年、宮内庁蔵）を描いている。この揮毫画家の選出は内国絵画共進会の成績が元になったようで[一〇]、米僊は京都を代表する画家から、日本を代表

する画家へ着実にステップアップしていった。そして、米僊が次に目を向けた先は、海外であった。

明治二二（一八八九）年の第四回パリ万国博覧会に参加するため、米僊は自費でパリに渡航をしたという[一二]。日本からの出品人総数は四六二名であったが、そのうち渡航したのは一三人で、米僊は海外輸出用の絵付陶磁器を扱っていた瓢池園の中村善次郎に雇われる形での参加であった。中村善次郎は出品で銀賞を受賞し、米僊は中村善次郎出品に対して協賛金牌を受賞している[一三]。米僊本人は、水中遊魚の図の出品に対して金牌をくれた、と回想しているので[一三]、この作品が絵付陶磁器の原画であったことが考えられよう。ところで、絵画の記録性を求めた米僊にとって、この旅行は格好の素材であった。「フランス大革命百周年」を記念して催されたこの万博の様子やパリまでの道中を記録して日本に伝えるため、パリから『京都日報』に「欧州渡航画報」「巴里随見録」などを掲載し、エッフェル塔などを写生している（図11）。これらは帰国後『米僊漫遊画乗』として出版された。

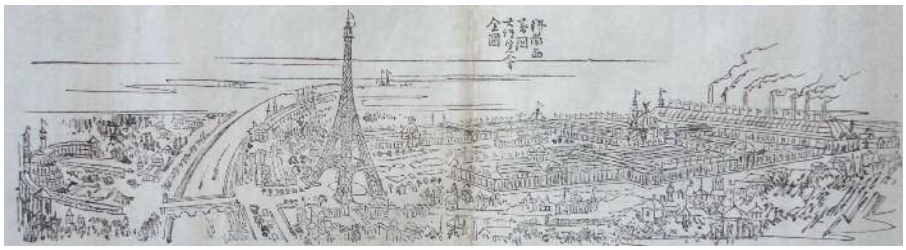


図11《巴里見聞録》『京都日報』連載 明治22年7月～10月のうち仏蘭西万国大博覧会全図

帰国した米僊が取り掛かったのは、京都に美術協会を設立することであった。絵画だけではなく、その他の美術工芸が一緒になって展覧会を開く、そのために京都が一丸となって東京の日本美術協会に入会することも検討したが、楳嶺と相談した結果、この際新たに京都美術協会を設立しようということになったのである。明治二三（一八九〇）年、建仁寺において発会式が行われた。会頭に府知事北垣国道を迎え、幹事に西村總左衛門や米僊、評議員に飯田新七、楳嶺、並河靖之、川島甚兵衛などを置き、委員には鉄斎などがいた。会員は二〇〇名を越え、ここに絵画、工芸の垣根を越えた京都美術界を代表する組織ができ上がった。若い時からこのような組織作りを何度もしてきた米僊にとっては、まさに京都画壇の近代化への総仕上げといえるものだったことだろう。協会は二つの活動を軸にしており、一つは展覧会の開催、もう一つは美術雑誌『京都美術雑誌』の発行であった。雑誌の創刊号で語られたのは、「古人崇拝ノ弊ヲ去リ流派分立ノ風ヲ除キ」「巧ニ換骨脱胎ノ妙ヲ用ヒ新機軸ヲ出スモ怪詭（かいき）（怪しく、普通と違うこと）ニ陥ラズ古意匠ヲ取リテ僻陋（へきろう）（ひねくれて浅はかなこと）ニ失セズ以テ古人ニ愧ヂザルヲ務ム[一四]」という志であった。米僊はこの時三九歳になっていた。楳嶺と共に京都で画壇の重鎮に収まる道が用意されていたが、そうはならなかった。京都を去り、東京へ活動の場を移したのである。

社会画家として（一八九〇～一九〇六）

明治二三（一八九〇）年、米僊は徳富蘇峰が創刊した国民新聞に参加するため、東京へ向かった。前年に『京都日報』の万博記事を見て感心した蘇峰が米僊を破格の待遇で誘い、米僊も入社を承知したのであった。その理由について米僊は、「画と云ふものは人を啓発したり、人を開発したりするの責がある[一五]」として、その責任を果たすためであったと語っている。ここで言う人とは、特定の個人ではなく国民の意であった。従来美術は特定の注文主にのみ享受されていたが、新聞というメディアにおいてはより多くの国民に届けることができる。絵画による啓発を行い、理想的な行動へと導くことを米僊は絵画の「用」と呼び、これこそが社会に絵画が必要である所以であると考えていた。自

図12《新島襄臨終場景画四葉のうち臨終図》

明治23年 同志社大学同志社社史資料センター蔵

身を「絶対的の社会画論」者と呼んだ米僊にとって博覧会や展覧会、新聞による報道はより多くの国民、すなわち社会と繋がる手段であった。国民新聞での仕事はというと、入社後すぐの、新島襄の死去を描き伝えた絵が残っており（図12）、こうした上質な挿絵によって文章を助けていた。

明治二六（一八九三）年にシカゴ万博が開催されると、米僊は再び自費で渡航し、《鷲ノ図》を鑑査合格で出品し、受賞している。また、会場の景況を国民新聞に掲載した。日本館であった鳳凰殿の他、ミレーの絵画など陳列されていた作品の縮図を細かに写したものは、『閣龍世界博覧会美術品画譜』（大倉書店、明治二七年）として出版された。現地では日本絵画についての講演を行い、席画を行ったりして大いにもてはやされたらしく、アメリカの建築意匠家、フアネスからは美術学校の教授となり日本画を教えて欲しいとの依頼を受け、それに応じたが、その時日本から父親が死去したという連絡があったため、約束は果たされずに帰国となったという。

明治二七（一八九四）年日本の情勢はにわかに不穏になった。朝鮮南部で起こった甲午農民戦争によって日本と清の間の緊張が高まったのである。緊張は交戦へと向かい、朝鮮をめぐる日清戦争が始まった。国民新聞においても、維新後日本が初めて経験する対外戦争を報道する使命を皆が感じていた。米僊もまた、この時においては絵画も平時の娯楽ではなく、人に真実を伝え啓発する絵画の「用」が与えられていると感じ、画によって報道するために国民新聞の派出員として従軍、朝鮮へ渡航することとなった。この時米僊の頭にあったのは後三年合戦絵巻のことであったという。これは甲冑などがつぶさに描かれ、平安時代の合戦を追想することができる記録の絵巻であり、他に平治物語絵巻や蒙古襲来絵詞もまた戦争の惨状を今に伝えている。自分もまた社会に必要とされる絵画を描くときであると考えていた。この取材が結実したものが、出版物『日清戦闘画報』全一一冊（大倉保五郎、明治二七～二八年）である。帰国後の米僊を待っていたのは、広島の大本営からの御用であった。宮内書記官から手紙を受け取り、大本営に出頭すると侍従から画家として見た戦地の様子を聞かれ、報告をしたのだが、ふと見ると本営には多くの掛軸が飾ってあった。広島の所蔵家から集めたものであったが、この中に下手な鯛の画があり、この代わりとして米僊が鯛を描くことになった。ではどうせならと玉座の前で御前揮毫をすることになったのである。この時は鯛と鶴を描いたようだが、この後も天覧揮毫の機会があったようで、鷹や虎を描いた話が伝えられる。

明治二八（一八九五）年、米僊は戦地を見た経験や天覧揮毫の経験を踏まえて、一世一代の絵画制作に取り掛かる。京都下京区の大雲院において金地極彩色の龍虎一双、金地墨絵の龍一双、泥引山水に青石関漢江図一双、雲形泥引に日清戦争図一双に加えて、日清戦争の各場面を一〇双の銀地に描く大仕事を請け負ったのである[一六]。このうちいくつかの作品が現存している。図13は銀地に描かれた一〇双のうち、鳳凰城陥落を主題にしたものである。屏風ではあるが、右隻から左隻へと展開する進軍の様子は、やはり合戦絵巻を意識したものとなっている。図14は金地極彩色の龍虎一双に当たる屏風である。円山派に倣ったもので、虎の毛並みは墨、色、胡粉、金泥などの線で写実的に表現されており、背に入れられた墨線の濃淡が巧みである。図15は泥引山水に青石関漢江図一双に当たるものである。戦況を写すため朝鮮に渡った米僊であったが、漢江に差し掛かったときにはその光景にいたく感動している。以下のように語っている。

> 尚石道を登り尽したる処濶然（かつぜん）（うちひらけたさま）打開け漢江の長流を望む坂を下れば村落あり関門ある是臨津の鎮西門なり門には我が番兵ありて韓人の出入を厳にす門は水に臨めり江上より雪舟元信の筆にある如き風光を賞し去に惜しき処なり[一七]

憧れていた大陸の山水を見た感動が伝わってくる。「雪舟元信の筆にある如き風光」は作品にも表現され、真景でありながら雪舟や元信に倣った、墨線を重視した古風な山水表現が意識されている。同時に色彩は新鮮で画面に近代的な明るさをたたえている。時代錯誤ともいえる、左隻の山道を行く騎驢

人物には、憧れの山水景に入り込んだ米僊自身が投影されているのだろう。この作品は、同年に行われた第四回内国勧業博覧会に出品され妙技三等賞を受賞した《鶏林勝景》と同作品である可能性が高いと思われ、米僊の生涯でも代表作といえる。

この年、画友であった楳嶺が亡くなり、米僊・楳嶺のひとつの時代が終わろうとしていた。米僊は、絵画界をふと振り返ってみると、随分革新が進んでおり、京都では竹内栖鳳が大いに活躍しているのを見てその刺激に狼狽した、と語っている。これからは「理趣三昧」で絵画を探求し、次世代の栖鳳たちに負けないようにと意気込んでいた。そこへ、岡倉天心（一八六三～一九一三）から、石川県の工芸学校の教員にならないかという誘いを受け、ここへ行く決心をしたのであった[一八]。ところが、石川に赴任してしばらくすると、眼を患ってしまい、ついには失明してしまう。この後は、美術評論や俳句にいそしみ、『米僊画談』（松村三邑堂、明治三五年）など多くの著述を残したが、明治三九（一九〇六）年、東京芝の自宅にて胃がんにより亡くなった。五五年の生涯であった。

おわりに

本稿では、久保田米僊という画家の足跡を一歩ずつたどってみた。その理由は、米僊がまことに明治を代表する人物であるように思えたからである。若い頃には文明開化に驚き心躍らせ、青年期には近代社会と自らの絵画の関係を模索し、世界を見聞し、京都を背負い、やがて日本を背負って活躍した。まるで時代に突き動かされるように画を描いた。米僊の画業を振り返ることが、時代を振り返り、日本画の近代化全体を概観する手がかりになる、そのような期待を持っている。個別の作品についての検討が今後の課題である。

徳富蘇峰は米僊の、絵の記録性によって真実を世に伝えようとするジャーナリズムに心惹かれ、栖鳳は流派に固執せずに新機軸を生み出そうとする姿勢に共感した。改めて見れば、粉本主義に陥らず、広く古画や西洋画の表現を学習して自己表現を達成したこと、日本画家として欧州に渡ったことなど栖鳳と米僊には共通点がある。栖鳳が「久保田米僊先生は私の師幸野楳嶺先生と兄弟のやうな親密の度に繋がれて居た人であつただけに、私も単に面識を持つて居ると言ふ以上に、より内部的な深さの交渉を持つて居た[一九]」と語っていることからも、米僊が栖鳳に大きな影響を与えたことが想像できる。近代京都画壇の先駆者として、さらなる検討の価値を持った画家ではないだろうか。

図4《四季耕作・八坂神社図》明治2年 個人蔵

図5《春景山水図》明治10年代 個人蔵

図6《涼風新風図》明治17年 個人蔵

図10《錦御旗奪還図(村上義光図)》

明治期 個人蔵

図8《五柳帰荘図》明治期 個人蔵

図7《御福図》明治15年 個人蔵

図13《鳳凰城合戦図》明治28年

個人蔵

図14《龍虎図》明治28年 個人蔵

図15《漢江渡頭春光・青石関門秋色》

明治28年 個人蔵

参考文献

神埼憲一『京都に於ける日本画史』京都精版印刷社、昭和四年
原田平作『京都画壇 江戸末・明治の画人たち』アート社出版、昭和五二年
原田平作『幕末明治 京洛の画人たち』京都新聞社、昭和六〇年
島田康寛『京都の日本画 近代の揺籃』京都新聞社、平成三年
今西一『メディア都市・京都の誕生 近代ジャーナリズムと風刺漫画』雄山閣出版、平成一一年
福永知代「久保田米僊の画業に関する基礎的研究（一）『絵嶋之霞』の作品分析を中心に」『お茶の水女子大学人文科学紀要』五五号、平成一四年
福永知代「久保田米僊の画業に関する基礎的研究（二）久保田米僊と日清戦争―『国民新聞』におけるルポルタージュを中心に」『お茶の水女子大学人文科学紀要』五七号、平成一六年
星野桂三・星野万美子編『忘れられた画家シリーズ三五 明治日本画の鬼才 久保田米僊遺作展』星野画廊、平成二六年

図版出典

図9『京都国立近代美術館所蔵名品集 日本画』光村推古書院、平成一四年

一 石川景蔵編『米僊画談』松村三邑堂、明治三五年
二 竹内栖鳳「思ひ出」『美之国』四巻、昭和三年
三 主に以下の文献を参考にした。久保田米僊『米僊画談』松村三邑堂、明治三五年。久保田米斎「父久保田米僊の生涯」『書画骨董雑誌 第七七号』書画骨董雑誌社、大正三年。
四 京都市編『小学五十年誌』京都市、大正七年
五 松尾芳樹「画学校出仕について」『京都市立芸術大学芸術資料館年報一八』京都市立芸術大学、平成二一年
六 源豊宗「今尾景年の芸術」『景年 今尾景年画集』芸艸堂、昭和五一年
七 福永知代「久保田米僊の画業に関する基礎的研究（一）『絵嶋之霞』の作品分析を中心に」『お茶の水女子大学人文科学紀要』五五号、平成一四年
八 久保田米斎「父久保田米僊の生涯」『書画骨董雑誌 第七七号』書画骨董雑誌社、大正三年
九 竹内栖鳳「思ひ出」『美之国』四巻、昭和三年
一〇 関千代「内国絵画共進会」『明治美術基礎資料集』東京国立文化財研究所、昭和五〇年
一一 黒田譲『名家歴訪録 上編』黒田譲、明治三一年
一二 『仏国巴里万国大博覧会報告書』農商務省、明治二三年
一三 石川景蔵編『米僊画談』松村三邑堂、明治三五年
一四 京都美術協会編『京都美術雑誌 第一号』文求堂、明治二三年
一五 石川景蔵編『米僊画談』松村三邑堂、明治三五年
一六 「米僊氏の揮毫」『絵画叢誌 第一〇四号』東洋絵画会、明治二八年
一七 久保田米僊「従軍特信」『国民新聞』九月一九日
一八 明治二八年、米僊が日本青年絵画共進会の審査員を引き受けた時、天心はその会頭であった。
一九 竹内栖鳳「思ひ出」『美之国』四巻、昭和三年

執筆者紹介（掲載順）

和崎　光太郎　　当館学芸員

車田　秀樹　　当館博物館主事

小中　秀則　　当館博物館主事

森　光彦　　当館学芸員

京都市学校歴史博物館

研究紀要　第四号

平成二十七（二〇一五）年　十月　発行

編集・発行　京都市学校歴史博物館
京都市下京区御幸町通仏光寺下る
橘町四三七番地

印刷　株式会社　田中プリント